もたちは、自分で自分を追い詰めたり、人を殺して塀の中に入ったり、子どもを殺してしまった母たちもいます。今北海道から沖縄まで飛び回っています。そんなところです。

北川：このママケアから繋がりありますよね。

川口：すっごいありますよ。もう専門職が支援をする時代は終わっていると思います。当事者が当事者同士、専門家の理屈っぽい一言よりも例えばママさん同士の一言で救われる、その時代が来ているのに追い付いていないのが行政ですよ。

野沢：この前しばらく音信が途絶えてみんな何してるんだろうって心配している時期がありましたが何してたんですか。

川口正義さん

川口：ああ、川口死亡説ね。中学卒業した後15歳以降のサービスってないと思いませんか、日本には。実は最近僕警察の事情聴取受けて、生後まもない子の死亡事件があって、支援していた子だったから、供述調書取られたりして、あと、公的機関が受け入れなかった自殺未遂した10代の女の子を保護して、その子を支援している最中にその親友が突然自殺をしたりとか。それで翻弄される日々を送っていました。なので、子どもや若者、生活困窮者も含めて、人が死なない世の中をどういう風に作っていけばいいのか30数年やり続けてきた。

野沢：最貧困女子の話をおしえていただけますか。

川口：最貧困女子と最貧困シングルマザー。静岡も最終的に性風俗の世界で生きなければ生きていけない10代の子たちやマザーたちがいっぱいいるんです。スクールソーシャルワークで関わっていても保護者の方との出会いがあって、「実は…」と言って面接場面で出て来たときに、性風俗の世界で生きる、性風俗の世界で生きているママたちと一般家庭で幸せに生きているママたちってそう差ないですよ。ところがスティグマがあって。性風俗の世界で生きざるを得ない少女・女性たちの支援なんておそらく国はやらないですよ。子どもの貧困でやっと風が吹いてきてますけど、

こども食堂だって、学習支援だって、とんでもない方向にいっているじゃないですか。うちは生活支援をやってますけど、あぁ、法律ができたあとえらいことになっちゃったなって思いますよ。そんな中で最もしんどい状況の中で生きている女性たち、母や少女たちをどういう風に、お節介をせずに、一緒に生きる時間を紡いでいけるか、支援とは呼ばない支援がどういう風にできるか、僕や僕の仲間たちで考えています。3月以降、シェルターを作ります。児童相談所のしんどさもわかっていますから、児童相談所に行く前に地域で支えるシェルターを、また借金して作ろうと思います。一戸建てで何でも揃っているので、どうぞママ部でも使ってくださいよ。

北川：繋がったらいろんなことができますよね。ママ部の活動は、予防的な意味合いがありますよね。

川口：大いにありますよ。

野沢：去年、日本の昼間の社会保障は夜の社会保障に負けてますよって川口さんおっしゃっていましたよね。子どもがいてお金がない、住むところや職もない、そういった人たちをその場ですぐに助けてくれるのは風俗しかない。

川口：安心・安全であるのが家庭でしょ。家庭の中に、居場所を失った子どもたちがどこに居場所を求めるか、学校ですよ。学校の先生たちの協力なくして子どもの貧困対策は進みませんよ。にもかかわらず、そういう動きをしない教育委員会が多い。静岡市は協力しあってますけど。教育と福祉が手を結ばないことが多い。学校に居場所を失った子たちがどこに行くか、昼間のストリートですよ。昼間のストリートでたむろっている子たちに対して、「いいたむろい方してるなー」って僕は声かけますけど、普通は白い目で見るでしょ。その子たちが夜の世界に入っていくんですよ。13、14、15歳で子どもを産むっていうのは、地方都市静岡でも起きているわけだから、やはり本当の意味で居場所をね、もっと本当にハードルが低くて、サンダル履きですっぴんで一張羅着なくて来

れるよな、そんな感じの居場所性を持たなければって思ってますよ。こう言いながら、「こういう居場所がいいな」って大人、スタッフやうち学生もいますけれど、思って運営する居場所はもう居場所ではないですよ。もうだめですよ、その時点で。居場所は子ども・若者、当事者がつくるべきで、こちらがこういうのがいいといった時点でもうある程度枠付けしている。だから居場所性とは何かという論議は80年代から続いているけれど、今居場所性がブームになっている故に、足元から考えないと結局は当事者を優しく傷付ける。だから制度サービスができてラッキーとは僕は思わないですよ。中身を作らなければ、「魂の殺人」をしている、当事者を殺していく。そういうところまで日本の福祉は来ていますよ。昼間の社会保障は崩壊していると思っています。

こども食堂ってふたつの方向に行ってますよね。うちのこども食堂は「子どもの貧困対策」のツールとして位置付けていますけど、しかしながら普通の居場所として運営しているところも出てますよね。その二つの流れが出てきていて、そうすると例えば県内の話で、こども食堂に来るこどもが親に高級車で送ってきてもらう、僕は日本にいる２千万人のすべての子どもに対して支援が必要だと思ってはいるけれども、でも、もっとも厳しい状況に置かれたところに届く制度サービスを作らなければ、結局は落ちこぼされるんです。アクセスできないんです。だからアウトリーチするのが当たり前だし、仕事は夜の５時から朝の８時までやるのが福祉の仕事であって、朝８時から５時までで終わるのは仕事じゃないって思ってますので。だからそういう意味で、声をね、声なき声をどういう風に聴き続けていくのかっていうのが難しくなってきているのではないかなって思っていますよ。

北川：いつもこれでいいのかなって悩みながらやってますね。女の子が出て行っちゃって、どこにいるのかわからなくなっちゃったときに、もうどうしようもなくなってタロットカードをやって、将来が明るいってでたらほっとしたりして、そしたら見つかったて警察から電話が来たりとか。そんな感じです。でもやっぱり小さいときからお母さんとか誰かほっとして支えてくれる人がいない子たちが、思春期になって生きにくさを抱えるので、とってもとっても大事な活動だなって思いました。

川口：静岡市、駿府城を200億かけて作る時代じゃないよね。学校の先生まず増やしてくれと。

野沢：川口さんのような人がいっぱい出てきてくれればいいけど、お金が回っていかないとなかなか生活できないし、そこがいつもね、課題ですよね。制度にしなきゃいけないと制度にするとなんだかぜんぜん違うものになっていって。でも制度にしなければいけない。そこのジレンマがありますよね。

川口：そう、だから本当にやりたいことは制度とかそういうのではないところでやっていく。僕はガンジーの塩の行進のときに残した言葉が好きで、「よきことはカタツムリの速度で進んでいく」っていうね。とんとん拍子でいく、変化していく事業にろくな事業はないですから。それと簡単にできる事業はろくな事業はない。地べたを這いずり回りながら何なのかって、資金繰りなんかも何とかしながら、そういう中で作りあげていく。どうしても制度サービスができると法律の縛りができていく、制度ができて行政の委託事業を受託したときに魂を失うところが多い、運営費ががーっと来たときにラッキーと魂を失っていく事業者が多い、だから受託するってことは危険を伴うんだって自覚しながら受けないといけない。やっぱりね、これからはままぶくろだね。ままぶくろしかないね。

井上：今はぶどうの粒で私たちだけでやっていっているんですけど、誰でもできる事業をしていけばぶどうの房のように広がっていくんじゃないかなって思うんです。私たちはぶどうの粒でままぶくろを受けたお母さんたちが、ままぶくろのようなまたちょっと違う形の自分たちのままぶくろを作りたいって思ってやっていってくれて、それが連鎖していけば、お金がそんなにかからないで徐々にだけど増えていくよねって言ってるんです。

北川：ここに来るときに新幹線降りてからどうやってくるのかわからなくて、電車でおばあちゃんに聞いたら「次だよ～」っておしえてくれたんですよね。そのうちそのおばあちゃん寝ちゃったんですけど。これが静岡なんだな、優しくあったかくって人に親切で、自分もあたたかさに気持ちよくなって寝ちゃったりして、本当に苦労はいっぱいありますけど、子どもたちが幸せになるための苦労だったら、みんなで力合わせてこれからもしていけたら素敵なのかなって、いろんなところでバラバラにしてますけど、このフォーラムのようにつながっていけたらいいなって思いました。今日はありがとうございました。

2日目

6 シンポジウム「向き合わないで生きる」

坂間多加志さん

坂間：おはようございます。ふじ虹の会の会長の坂間です。ふじ虹の会というのは、富士・富士宮地区の里親会です。里親というのは、様々な事情で家庭で暮らせないこどもたちを施設ではなくて自宅で預かって養育をします。藤井さんも里親をなさっていますし、昨日登壇していただいた北川さんも里親さんです。今、静岡県は…、静岡市は里親の数がものすごくいっぱいいて全国的にも有名なんですが、静岡県のほうは惨憺たるものなんです。ですから、この中に静岡県に住んでいる人がいたら里親登録していただきたいと思います。

この「向き合わないで生きる」に込めた思いがあって、それは、「支援者が」という部分が強くなりますが、「向き合わない」ということと「向き合わせない」というところです。

私は高校三年生の冬に「どんぐりの家」のアニメ映画の各地の上映実行委員会に参加しました。そこで知的障害の子を持つお母さんと初めて出会いました。それまで自分の周りには知的障害児・者というのはほとんど出会うことがなく、学校にも特別支援学級があったわけでもなかったので触れ合うことがなかったので、知的障害とか施設の話とか何もわからないまま参加していました。上映会を終えた後にお母さんたちが「やってよかった」、自分の子の話をしながら「今まで生きてきてよかった」ということを涙ながらに語る。そこで初めて知的障害の子を持つ親の気持ちに触れた—これが、障害者福祉との出会いです。これが97年～98年の話。

それから20年近くたって、今、福祉の仕事をしていますが、あれから私たちは何か変わったのかと感じています。当時、障害者施設は措置制度で行政処分として入所する。そして支援費制度が始まり、本人や家族の希望によってサービスが選択できるようになった。この頃、相談支援に携わる人は施設・法人のベテランの猛者がどんどん出てきて、行政に支給決定のために戦っていきます。それからも自立支援法に変わるとか、「自立と社会参加」の理念が強まる中で、支援者側も自分たちは当事者や家族のために何をしなきゃいけないのか・どれだけ戦っていかなきゃいけないのかもの凄く模索していました。この様子を見て、当事者主権の時代が来る、福祉は確実に変わると思ってワクワクしていた。けれど、この5年くらいは失速を感じています。行政が前を行き制度を作り、福祉がそれに従い、その後ろにいる当事者が引っ張られている。やっぱり、ここから抜け出せないんです。けど、当事者が前を行き、その後ろに地域住民がいて、それを後ろから後押しをする福祉、さらにその後に行政がいる。こうなるはずなんです。

私が活動しているときに意識していることは、当事者の声を大事にすることや社会のへだたりをなくすということです。ここで、活動して生きた中で出会った当事者の声を紹介します。「マジョリティは多数派ではなく、社会的脅威だ。彼らは社会を作る力を持っている（ゲイ）」「世の中いろんな人がいても良いよねじゃなくて、も

う既にここにいるんです（ゲイ）」「私のいろいろな感覚の話。健常者で権威のある坂間さんの話なら伝わり、当事者の私の話はきちんと理解してもらえず。一体何がダメなんでしょうか(発達障害)」「もういい！どうせダメなんでしょ。僕の人生を他の人が決めるなんて変でしょ。差別だ！そんなの差別だ！（里親家庭で暮らすこども）」これは我が家で暮らす子の声です。小学６年生のこどもにこう言わせてしまう社会があります。私たち里親は親権者ではなく、こどものライフステージの変化のときに「あんたとこの子は本当の家族じゃない。親でもないし、子でもない」という現実をドンと目の前に突き付けられる。

当事者の皆さんは、ただ自分の望む人生を送りたいだけなんです。なのに、いつも誰かが門番のように立っている。それが何かというと、行政＝不正を起こさせない社会保障制度。医療＝行政が説明できるための診断。当事者は診断をもらうために何度も何度も踏み絵を踏まされる。福祉＝「これがこの子、この人にとって良いだろう」という現場の判断。法律上は認められているものも支援者が考えるこれが良いだろうという判断で止めてしまう。向き合っているようで、実は立ちはだかっている。

また、へだたりをなくすということは、福祉が括りだしたものは福祉が責任をもって社会に溶け込ませていく。そのための福祉活動をしていきたい。福祉事業ではなく福祉活動、福祉活動とは何かというと社会活動です。このあたりのことまでが、今まで私が福祉に携わる中で思うところです。私たちがこういう福祉活動をやりながら知らず知らずのうちに、当事者をつらい事実に向き合わせているとか、当事者に突き付けているとか、そういったことがいっぱいあると思います。

藤井康弘：昨年の６月まで厚生労働省で仕事をしておりました。退官後は福祉とは関係のない団体で働いて、養育里親をやっております。

私のほうからはふたつ。一つは里親の立場から向き合わない生き方というコンセプトで考えて、考え方としてまとまっているわけではありませんが、所感として申し上げたいと思います。もう一つは、制度を作る立場であったのでその立場と、制度の中でこどもを育てる立場とその両方の立場からどんなズレとか誤解が生じるのかをさせていただきたい。

まず、向き合わないで生きるということですけど、支援者とか当事者とか言いますけれども「里親」ってどっちなんでしょうかね。里親って支援者なのか当事者なのかなかなか難しいところがあって、まあ両方ですよね。こどもたちと一緒に生活をして、家庭の外の児童相談所や里親支援機関から助言等をしてもらっている立場から考えると当事者なんですけど。当事者の立場に立って向き合わない生き方を考えると、私たちにとっては児童相談所や里親支援機

関でありますが、確かに押しつけがましく言ってほしくはないと思います。ただ、これは逆説的になりますけれども、私はむしろ東京都の児童相談所の皆さんなんかには「もっとこどもに向き合え」と言いたい。支援者たる者が表面的なところだけではなく、そのこどもが、どういうこども、どういう成育歴、どういう実親、どういう環境で育ってきたかというところをちゃんと頭に入れて、それでどういう特徴が出ているかということを分析的に考えて、どうすれば良いかということを考えろと言いたい場面が多いですね。児童相談所や施設は課題には向き合っているつもりなんだけど、こども自身には向き合ってないだろうと思うわけです。支援者はこどもの課題ではなくこども自身に向き合ってほしい、これは主張したいところです。

それともう一つ。制度を作るということと個々の対象者に対する支援をどうするかということとでは、私は両方の立場も持っていますが、かなり次元の違うことだと思います。制度を作るというのは支援のフレームワークを作る仕事。この範囲をはみ出してはいけないとかこれだけのメニューをやってほしいとか、対象者をどうするかとか、報酬を出すときの基準とかガイドラインというかたちで提供するわけです。制度を作る側からするとそれが限界と言えば限界で、対象者のニーズに対して制度でこういう場合はこう支援してほしいというところまでは決められないので、現場で支援をされる方たちにはフレームの中で自由に柔軟に行動をしていただきたいし、行動できなければいけないと思います。なかなかこれがうまくいかない場合があると思います。制度を作る側としてはフレームワークの中で自由にやれるようにしたいと思うのですが、自由度が高ければ高いほどモラルハザードみたいなことが起きてくる。ニーズはあるのに何もしないでお金をもらってしまうとか、報酬を高くもらえることばかり提供するとか、サービス必要ないんじゃないかという人たちまでサービスの対象として広げるとかですね。柔軟に構えれば構えるほどそういう誘惑に勝てない事業者さんが出てくる。三十何年間厚労省で仕事をしていて、医療も介護も福祉もあらゆる分野で起こっています。障害福祉でもＡ型でも放デイでも多くなった。そうすると、フレームをきつくしなければいけなくなる。ルールを細かく定めたり、減算するルールを決めたりとかしてモラルハザードへの対抗措置を考えるわけです。そうすると柔軟な考えで一生懸命やっていただいている事業者さんには使いにくいものになってしまう。一生懸命やっている事業者とそうでない事業者を行政が峻別するのも難しいところです。行政の立場からすると難しいところですが、一方で現場の一里親の立場に立つと、ルールはどうであれ個々の真のニーズに寄り添ってやってほしいわけです。

坂間：赤渕さんはお寺の副住職でありながら、一市民として地域のいろんなボランティアに携わっています。制度や支援者の話をしましたけれども、今、地域・コミュニティで市民がこどもや若者、高齢者の支援に乗り出してきています。「担い手」なんですね。そこで、こう言った市民が実際に同じ町・同じ村で困っている人の支援にあたるうえで参考になる体験談や失敗談を語っていただきたい。

赤渕淳心：僕は一市民。町に暮らす一人としてどんなことができるか。自分の中では福祉事業とか福祉のボランティアをしているという感覚は全くなくて、僧侶として生きて周りの人と繋がっていきたいと思っているだけですね。そして、皆さんが言われている福祉の専門家がやっていることと何にも変わりがないと思っているので、福祉の専売特許だと思わないでほしいと思っています。

仏教を学んできた中で大学の先生が「人間は生まれながらにして尊い。これは理念でも理想でもなくて、事実だ」と言ったことが自分の胸に突き刺さっていて、その中心の部分があって、現状を見渡してみるとそうでない

事実がけっこうあるんですよね。生まれながらにして尊いのが事実だと言いながら、虐げられている。これっておかしいだろって思えてくる。そこから仲間を増やしていく、それが私の僧侶としての生き方かなと。

田坂成生代表

さて、今回のタイトル「向き合わないで生きる」ですが、実は失敗したことが最近ありました。ひょんなことから富士市の若者相談でボランティアサポーターになったのが始まりで、お寺の清掃のアルバイトに数人来てもらうようになりました。それから職員さんから一人の担当サポーターになってくださいと言われて受けた。3か月後・半年後の自分はどうなっていたいか目標を定めようと話し、最終的にはバイトをして自分のお金でゲームを買うという目標になった。4月から9月のプログラムで初めていったが、7月後半から8月…、お盆前からは私が忙しくなっていき、それまで1週間に1回程度会っていたのが「忙しいからごめんね」と言うようになり、話し合いも他の職員さんにお願いをしていた。その職員さんは9月の卒業式に良い発表ができるようにと話を進めてくれて、ラーメン屋さんのアルバイトに行こうと。本人も「はい、わかりました」と。一緒に履歴書を書いて、面接についてきてもらって、面接でも店長さんが話をよく聞いてくれて、若い力に期待してるよと言ってくれたという報告を聴いて、ああ良かったなぁと思っていたが、その日の夜に本人が悩んじゃったんです。こんなにトントン拍子で進んで、周りが進めてくれて自分も「はい」と返事をしたけど、働けない。人が怖くて外に出れなかったのに、ラーメン屋で注文聞いてなんていう仕事はできない、と。その後、卒業式の2・3日前に音信不通になってしまった。あれ、どうしたことかと思い、同じ立場の仲間からメールをしてもらったら「申し訳ないけど、一緒にいけない」と返信がきた。翌朝会いに行ったが、一緒に行けなかった。失敗したーと思った。やっと家から出られて、同じ立場の仲間と話ができて、なのになぜ最後に本人の気持ちを無視して進めてしまったのかと反省した。けれども、その後があって、今までだったら何カ月単位で家から出られなくなってしたっていたと聞いていたが、一緒にいた仲間たちに「どうしたら良いか」と聞いたら、みんな同じような経験があって、「メールはしても、本人が出てこれる気持ちにならないと出てこないからそっとしておきましょう」と。「大丈夫?」と思ったが、その通りだった。メールは続けてもらい、3週間くらいしたら申し訳なさそうな顔をして出てきた。「良かった。会えて良かったよ」と。

その時に思ったことは、支援者と言われる人が一生懸命手を引っ張ってぐいぐいやって、でもそれってどうなのかな。この場合、結局のところ同じ経験を持った若者たちが友達になって、横にいてくれたり後ろから歩いて来てくれたりして、それでこの若者は助かったんだと思う。私は何もできない、できていない。同じ立場の子がそこ

に座って「私はこんなことがあった」と語り合う。会ってすぐに話はできませんよ。何日も何回も時間をかけながらポロリポロリと出てくる。それらを聴きながら、自分ひとりではないという思いがみんなに生まれてくる。連帯が生まれて、一緒に行動するようになる。誰かが向き合っちゃうと、「あんなこともあるよ、こんなこともあるよ。どうやってみな」となり、それができないと「なんでできないの?」になってしまう。これは通用しないと思いました。

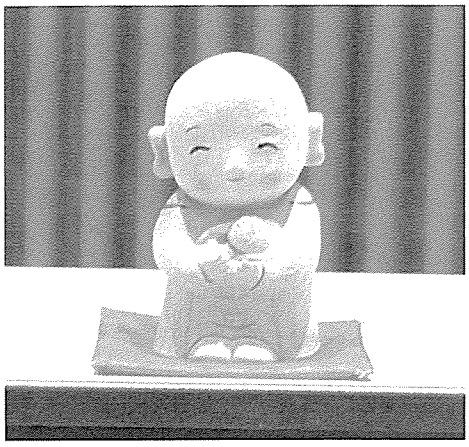
隣にいて話を聴いて、抱えているものをだんだん出せるようになる。それでいいんじゃないかな。その都度、作り上げていけばいいし、必要なものがあれば誰かをつなげていけばいいという対応でいいんじゃないか。行政のやり方と僕らのやり方の違いってそういうことなのかと思います。

坂間:市民で思いのある人が地域のボランティアとかをやろうと。里親になろうとか、こども食堂を立ち上げようとか。それ以外にも福祉や教育の現場でも熱心な人がいます。そういう人たちって、それは悪いことではないんですけど、熱心すぎて正面から向き合いすぎてしまうとか、悩みを抱えた人たちの声を正面から受け止めすぎてしまい、それをド正面からストレートに返してしまう。そういったことがあるんだと思いますね。しかし、これからはこういった市民を増やしていって、みんなで優しい街をつくっていこうと思います。

ここでひとつスライドを出します。この鼎談の打ち合わせを赤渕さんとしていたときに、彼からド正面から受け止めてド正面から返してしまう話を聴きました。相手を正面から受け止めるつもりだったが、困難を抱える人の前に立ちはだかっていた。

福祉施設で働く人たちも経験があると思います。最初就職したときは思いがあって、目の前にいる利用者さんに対して、この人の為にもっとできないか…。この人がもっと幸せになるために、この人がもっと自分らしく生きるために、夢を持って生きられるために、私たちはもっと何かできないか。一生懸命考えて考えて考えた結果、気づいたら立ちはだかってしまっていた。赤渕さんのような失敗をして、「ああ、何をしていたんだ自分は」と反省をして生き方を変えていく人と施設の常識とやり方に染まっていく人といると思います。赤渕さんも立ちはだかってしまったときもあったかと思います。先ほどの話は、その次の失敗談だと思うんですね。

障害福祉のワーカーにもよくあるんですが、障害の自己受容や家族の協力を得るために向き合わせようとする。「自分の障害特性をちゃんと理解しましょう」「自分の障害を理解しなければ次に進めませんよ」と。生きにくさを体験してきて、20代30代で発達障害と診断された人がこう言われるわけです。また家族に対して、「家族の協力がなければできませんよ」とガンガン言う。だけど、家族って一緒に暮らしている存在であって協力者ということではないですよね。協力する立場なのは支援者のほうです。なのに支援者側が主体になって家族にそういうことを言ってしまう。これがどういったことかと言うと、その人に自分のできないこと、家族が今まで頑張ってやってきたこと、つらい思いをして、涙を流しながらやってきたことを何べんも突きつけ続けているんです。そこで、向き合わないでやっていきましょうって話をすると大体出て



くるのが、「寄り添います」って。すると福祉の人って「こんにちは。よろしく。私はあなたの味方。私に何でも話してきて」と言って、特に熱心な人がそうなんですけど、最初から距離が近いんですよ。けっこう皆さん頷いていますね。グワーっと来るんですよね。一般の人と人との関係でそんなに距離が近いことってないですよね。それで、依存しすぎてしまうことや自立に向けてのエンパワメントを意識すると、支援者は段階的に離れていく作業に入るんですね。支援者の頭の中では段階的に少しずつ。けれど、当事者は急に突き放されたと思った。

では、そこをどうするかと言うと「伴走」という言葉が出てきます。これが、先ほど赤渕さんが話をしてくれた「伴走しているつもりだった」というやつになります。一緒に活動をしながら少しずつ提案をしていたつもりが、気づいた時には相手の手を引っ張って自分が前を走っていた。こういうことがあります。

そして、「慮る」ということですけれども、相談に来た人ってさんざん自分たちの苦手なことや生きづらさに向き合って「どうしよう、できない」という思いの中で整理がつかなくなって歩んでくるんですね。家族もそうです。こどもが荒れて困るからどうしよう等悩みに悩んでくる。社会的養育もそうです。我が子を他人に託さざるを得なくなる状況って、必ずしも親がそれを望んだわけではない場合もあるわけです。

自分たちの生活能力とか考える力、様々な情報を整理する力、そういったものがどうしようもいかなくなって、焦りと不安でどんどん落ち込んでいって、そして生活がどうしようもなくなって相談の窓口に来る。そこまでのプロセスを考えないで、近い距離に入っていき、相談が始まったら彼らのできなかったことを突きつけ続ける。なかなかクリアできない高い目標を示しながらです。そうではなくて、そこに来るまでの道のりを慮って相談や支援をしてほしいと思います。

いろんなことに対して当事者は目を伏せているわけでも逃げているわけでもないと思うんです。自分のなんとなくわからない生きづらさに対して向き合っていないわけでもない。だけど、向き合わなければだめという強烈な支援論によって苦しめられているところがあるかなと思います。

藤井：坂間さんの里親やいろんな支援の経験や赤渕さんの経験と私が東京都で経験していることってかなり格差があるかなと感じますね。今坂間さんがおっしゃったこと、あるいは赤渕さんがやられていること、そんなに熱心な支援者がいていただけたらすごくありがたいなと思いますね。うらやましいなというところもあります。

今日のお話のなかで、ではどうしたらよいとかの結論みたいなものが出せれるわけではないですけれども、志を持って、皆さん対象者自身に向き合ってニーズを考えていくのは必要なんでしょうけれども、あまり気持ちが先走ってもいけない。そこの塩梅を考えていかなければいけない。それだけやっぱり福祉の支援は難しいと思いました。

坂間：塩梅ってすごく大事ですよね。福祉の支援っていろんなケースを知っていろんな経験をして、ノウハウをいっぱい持っているので、それらをぜひ地域の一般市民に向けてもっと発信してほしいと思います。そういったアドバイスを受けると、赤渕さんみたいな市民で相談の担い手になる人が、「そうか、そうやればよいのか」ってわかるようになる。

赤渕：言ってもらえたらいろいろ手はあります。お寺のこども会で知的障害の子を受け入れるときにどうしたらうまくできるか、何が必要かをお父さんお母さんと相談したり、若いスタッフが病院に働いている先輩に聞いてきたり。

坂間：そういうときにアドバイスや応援できる福祉の支援者が地域にいるといいですよね。

今日は、この場での話を聴いて皆さんがどう思うかというところをすごく大事にしたいなと思っていて、僕が前で話をするときっていつも結論までは出さないんです。モヤモヤして帰ってもらおう。皆さんに宿題を持って帰ってもらいたいんです。ぜひ、いろいろなことを体験しながら、ここで聴いた話を思い出しながら自分の中で答を見つけたり、仲間や同僚と一緒に答を探してほしいと思います。そして、何よりも大事にしてほしいのは、当事者の人と一緒に話をして答を探し出すということです。決して向き合いすぎたり向き合わせすぎたりしないようにしないでほしいと思います。ありがとうございました。

7 講演「石垣島から吹いてくる風」

津嘉山航さん

(株)ゆいばいしがき代表取締役

津嘉山航さん（左）と本後健・厚労省生活困窮者自立支援室長（右）

私の自己紹介、先ほどご紹介いただいた通りなんですが、実はＵターンはですね平成13年です。もう15年、16年のＵターンしての仕事に携わっています。

東京から約2000km、大阪からも1600kmほど離れています。台湾の方が近いです。人口が約55000人いる地域です。12の島々成り立って1市2町の島で私は仕事をしています。石垣市石垣島にほとんどのサービス、資源があります。夏期だけ、パートやアルバイトで石垣に移り住んで仕事をしている若者も多いです。5000人位の障害者の方がいらっしゃいます。高齢化率は20%前後ですね。そして出生率は2.16が石垣の現状ですね。そして7人結婚するのに対して3人くらいは離婚する。約4割はね、結婚して離婚しているっていう地域です。出生数はだいたい600人ちょっと毎年生まれています。その中で要保護率、乳幼児健診とかそれこそ1歳検診、1歳半、3歳検診までちょっと気になるかってご指摘を受けてフォローするんですがだいたい20%近くいらっしゃる地域です。比較的多い地域なんですね。発達の妨げを抱えるお子さんの多い地域です。

65歳以上の死亡率が一番高いのは、8割が血管、脳血管障害で亡くなるんですね、でその中でも65歳未満で死亡する割合は沖縄県が全国No.1なんです。健康長寿県だったのがそうではなくなったんです。その中でも石垣市はダントツで一位なんですね。3割近くの方々が65歳未満の方が血管障害で亡くなってそういう地域です。後天的な高次の機能障害、身体障害の方々、精神障害の方も多い地域です。

私のやっている仕事は今リリー石垣っていう所の会社を作って事業を運営しています。その背景はですね、授産施設や更生施設で働いてたのですが、障害者のいただく工賃が一万円に満たない。やっぱりもっとやりがいがあるなりもっと工賃、給料をもっと貰いたい方々の相談をたくさん受けるようになったことです。

もう一つは、石垣市はちょっと今ミニバブルでマンションとかアパートがどんどん建っていて、農地とか土地がどんどん県外の方々に買われて転売される地域です。農業の担い手がいないからです。農地がどんどん売られていったりとか、農業後継者のいない高齢化したお爺お婆の土地がどんどん荒地になっていく時に「じゃあ、私たちは障害のある方の働く場所を作りたい」。「農地をなんとか残したい」という高齢の農家とのマッチングができました。それで農業をできる株式会社を作りました。農業法人を作ったということが最初の経緯です。

西表島では小さな作業所を運営しています。10名ほど障害者の方が通られております。その地域は近隣に小学校とか中学校とか保育園があって、子供さん達が立ち寄る場所になっています。子供たちが空いているスペースを使って勉強したり宿題したりそういった事業所としても使っていただいていますし、あと高齢者の方のサーターアンダギーの味の伝承という事でお年がかなり高齢の方で地域の人気のあったサーターアンダギーを作れなくなったという事でそのおばあちゃんから私たち障害者施設の方で味を引き継ぎたいと教えていただいて、それを地域でお出ししているということもさせていただいてます。時に一人、独居のお婆が寄ってお喋りして帰るっ

て場所としても使われています。港にショップを構えているんですが、ここのショップでは西表島の作家さんが作った商品を買い取って販売をしています。だいたいひと月に110万円程度の売上があって1000万円超えるB型事業所であります。

「ゆにばいしがき」という農園は約5000坪の土地があります。60m × 70mの大きなハウスがあってそこでマンゴーを作っています。アップルマンゴー、キーツマンゴー、人の頭ほどの大きさになります。加工施設も持っています。島ラッキョウや島唐辛子、あとは空港の食菜管理のお手伝いしたりとかJAや商工会とのタイアップで一次加工のお手伝いしたりしてます。今の時期は石垣島の気温が大体20度位なんです。10度前後の低さにならないとマンゴーの花が咲かないんです。花が咲かないということは着花しないんで実が成らないんですね。でそれでちょっと毎年ヒヤヒヤしながらこの時期「マンゴーの花咲くかなぁ・・・。」「実が成ると良いな」と思いながらヒヤヒヤして仕事をしているところです。その他パッションフルーツ。授粉はとても手間がかかるんですけども、障害のある方も一緒にやっています。島唐辛子はとっても人気です。一年間通して作付けできる実験をしています。いろんな調味料関係の会社からお問い合わせがあります。大量に生産できればすごい収入源になると思って仕事をしているところです。

この広い5000坪ある土地の半分は更地の状態でなかなか使い切れないのでここで石垣牛を育てたいなと思っているところです。石垣牛は一頭辺り70万円位するんですね。一頭あたりといっても出生9ヶ月の子牛を売るんですけども、それを神戸に売ったりとか松阪の方に売ってそこで生産された期間が長ければ長いほど、神戸牛と名前が変わったり松阪牛に名前が変わるんですね。元々は石垣で生まれた牛です。それをなんとか出来たらなと思っているところです。

だいぶ前になるのですけど養育手帳B2を持っている方でした。知的障害の方なんですけども、無銭飲食とか無免許運転、万引きを繰り返して積み重ねて拘留されてた人ですが国選弁護人からある日電話がありまして、「自分は、知的障害とか障害者支援で障害者に関わったことがないので、津嘉山さん、助けて欲しい」。生育歴や生育環境、どういう経緯でこの犯罪に手を染めてしまったのかっていうことの背景を一緒になって立ち会って欲しいっていうことで証言させていただきました。結論から言うと懲役3年執行猶予付きだったんですけども、保護観察処分3年の決定がされた方でした。この方を受け入れる事業所はなかなかないっていうことで当時働いていた法人の入所施設にお願いして、そこを拠点として応援できればという事できっかけを作りました。色んな方々に根回しをしてですね、例えば警察官はよく少年時代から彼のことをよく知っていて軽犯罪を積み重ねたので大きな犯罪に繋がらないといいなという事で経過を見守るとか、あとは裁判官はですねとても好意的だったとか、保護司が元警察官で彼のことをよく知っていた。生育歴も知っていた。みんなで支える仕組みづくりをしたり、ご本人さんの願いであるヘルパーになりたいってことでなんとか入所施設の入所者の部屋の掃除とか職員の補助的なものをやっていけないかということでお願いしたり動いていたんですけども、3年目に再犯をしてしまった。　今、彼は完全に刑を終わってですね。石垣島では周りの目もあるしもう帰って来れない。ですので、石垣島ではなくて沖縄本島のグループホームで生活をしながら、就労継続支援A型で働いています。彼とは保育所にいたころからの付き合いで、彼はなぜ犯罪をしてしまったのか、なぜ繰り返してしまったのか、このあと続きがあるのでお話を後でします。

次の事例です。この方は嫌疑不十分で最終的には何も処罰は受けなかった方です。20代なんですが15歳の頃からのお付き合いで、療育手帳を持っている方です。学校になかなか行かない。中学校の福祉支援学級に在籍している時は不登校状態で、タクシーの運転手さんが客待ちしている間、運転手さん同士で少し離れたところで麻雀したり、話したりしてる。そのすきに空いてる車両から金銭盗るんですね。台湾の人の顔立ちに似ているんですね、お母さんが台湾の2世の方なので、「タイワンからボクはきました。でも帰れなくなりました。お金がないんです、助けてください」みたいなことを観光客に言って泣いてお金をいただく。それを自分のお小遣いにして好きなことに使うという生活をしていました。県立病院の病室からお金を取ってしまう事もやっていました。本人といろいろ話してみると、お父さんが3人くらい違う兄弟が11人いる。触法のお兄ちゃんもいますし、悪

さをして暴力団の組員的な動きをしているお兄さんがいたりとかそういった中お母さんは毎晩スナックで働いていて、国民健康保険料を滞納して全然病院に行けない、この子の歯は真っ黒な状態ですね。複雑な家庭で、働いてというよりも嘘をつくことがこの子にとっては生活の一部であって、嘘をついてお金をなんとか手に入れてそして自分の食べるために生きてきたと言うのがこの子の人生でした。私の父親は民生委員とか児童委員をしていたんですけども、15歳のころのお母さんを支援していたことがわかりました。ですので、お母さんには私の父が関わって、この子ともう一人いるんですけどその子供さんについては私が関わるっていう親子二代にわたる支援です。

同じ時期にこういったこともありました。与那国島から来て住む場所がない知的障害の子がいて、入所施設から特別支援学校に通っていた子のことです。その入所施設でうまくいかなくなって追い出されてしまい、バイクや車、ヤンキーに憧れていて自転車を改造して遊びに出るのです。入所施設の門限を守らなくて、夜間も遅い時間に帰ってきて、叱られる毎日をしてるんですね、ただ彼は療育手帳もB1だったんですけど、ちょっと言語の表現がうまく出来なくてついつい手が出ちゃうんですね。入所施設の方々に対して手を出してしまうんですね。先輩でかなり年配の方が多かったんでこの10代の子供にとってみたらとても嫌気のさす場所だったんですね。ちょうど私のお家が空家としてあったので一緒に一年間住むことにしたんですよね、受け入れたんですよ。
若くてエネルギーを発散したいだろうし、ヤンキーになりたいという部分もあるだろうしっていうことで、ある時彼のあとを追いかけました。そうするとやっぱりヤンキーのお兄ちゃんと一緒につるんでるんですよ。なんかうまくやり取りしてるんですね、ヤンキーに憧れてはいけないのだけど、お兄さん達に実は支えられてもらっていたってところがわかりました。ですので、「私は津嘉山と言います。相談員仕事をしていて、実は彼と一緒に生活してるんです。何かあったら連絡ください」とヤンキー４人に名刺をお配りしたってことを覚えています。ヤンキーのお兄さん達は「この子可愛いんだよ。一生懸命ね言葉喋れないけど、一生懸命自分たちの真似するんだよ。お酒を飲もうとするけど俺らはお酒を飲まさない」と言ってくれたりとかですね、ただ居場所を求めてるこの彼の居場所何処があんだろなぁみたいな所を、教えてくれた事がわかりました。これがきっかけに石垣島で初となるグループホームになったんですね。当時私のお家だったんですけどこれ提供して信頼関係を作りました。

先ほどの事例に戻るんですが、この15歳の彼を一緒に住むことにしたんですよ。彼とそのヤンキーだった彼と私とそしてグループホームとしてスタートしてたので、他のメンバーも一緒になって生活しました。私は世話人というよりも管理人みたいな感じでね、自分のお家でもあるので一緒に生活しながらこの方々のちょっと見守りをしようって事で一緒に生活をしました。この彼は、お金がないのでまず住居を移すことによって自分の国民健康保険証をとれますね、それによって歯の治療を全部やりました。全部私の持ち出しで「出世払いだよ」ということでお金を立て替えてやりました。そして彼はスポーツにちょっと興味があったので石垣島マラソンとかトライアスロンそういった何かしら自分がプラスになって評価されるような場を作ろうってことでそこで展開をしました。

彼は障害者学校卒業したあと就職できました。お菓子業者に就職できたんですが、そこで上手くいかなくて離職してしまったんですね。その頃うちの会社「ゆにばいしがき」を作った時期だったので、彼を受け入れました。マンゴーの栽培がとっても上手なんです。マンゴーの水撒きももちろんですけども高いビニールハウスの上に平気で歩いているんですねですからほとんど職員と同じような感じで、高いところに乗ってビニールを外してネットを張る、そういった作業やってリーダー的な存在に携わっておられました。とっても優しい性格ってこともあって、より支援が必要な方がいらっしゃるんで、その方にとってもリーダー的な存在だった。マラソンやカラオケ、旅行にも皆で行ったりとか、あと演劇活動にも参加したりとかしました。自己肯定感を少しづつ上げるということでどんどん彼のそれこそ成長をと頼もしく思っていたんですね。ただたまに悪さをしてしまって、嘘をついたりとか同じＡ型利用者からお金を借りたりとか、「お金を頂戴」と言ってせびったりしまったりとかですね、またはグループホームの旅行の時にお台場に行ったんですね。そのお台場に行った時に、踊る大捜査線に彼は憧れていて、「事件は現場で起きているんだ･･･」ってあのセリフがすごく好きで警察に電話しちゃったんです。グルー

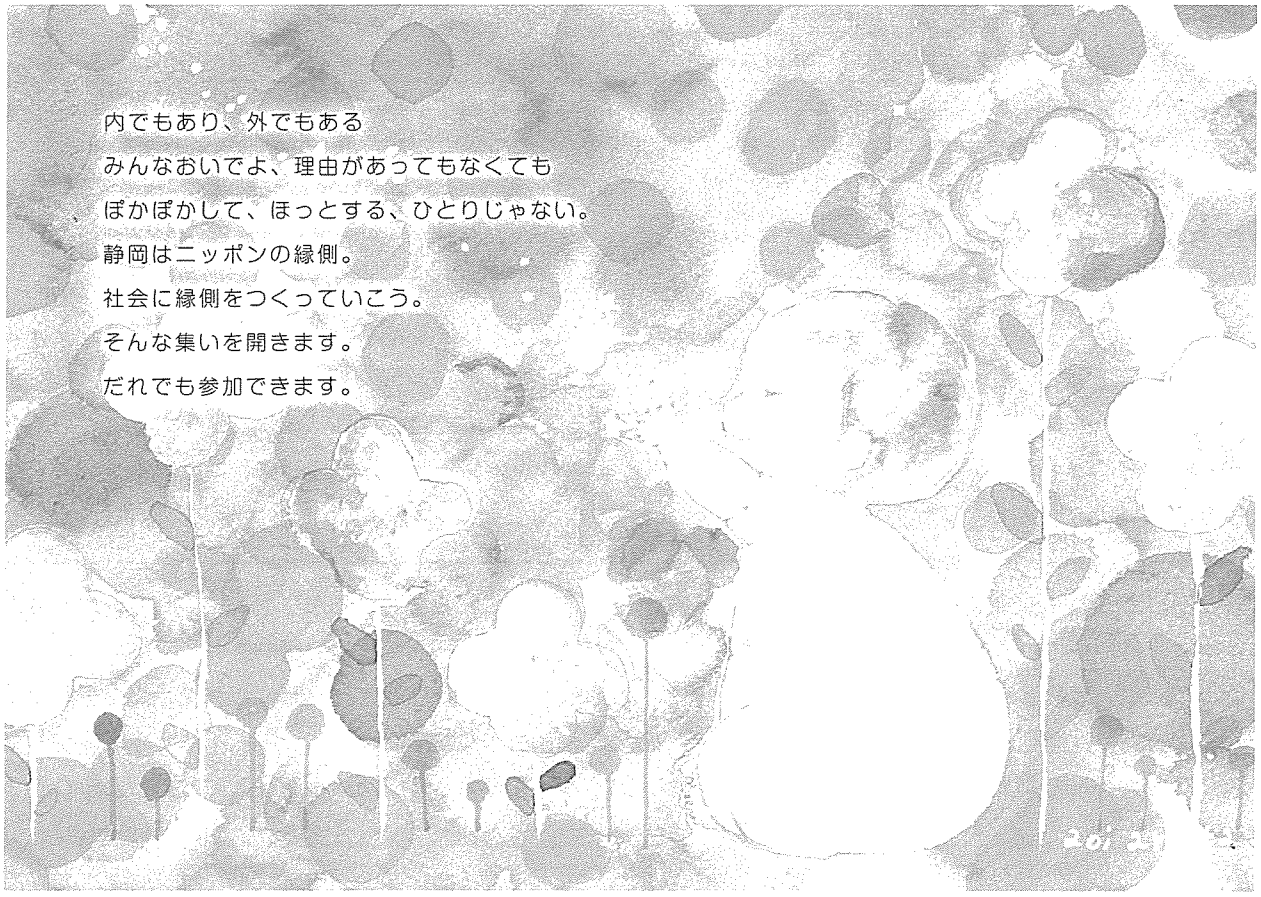
プホームに帰ってきてから、電話がかかってきたんですね。「〇〇署です。そちらに△△君はいますか？」。ビックリしましたね。電話番号の履歴が残っているのです。携帯電話のね、履歴が全部残っていた。彼は、要注意人物として未だにお巡りさんからは見られています。

ある時ですね「高校を中退した女の子がちょっと困っているので、津嘉山さん助けていただけませんか」と相談をいただきました。この子はとてもジャニーズが好きなんですね。ジャニーズに憧れていて「ジャニーのコンサートに行きたいんだ。」って事で凄く一生懸命を持っていた子です。でお洒落で小綺麗にして可愛らしい子だったんですね。高校を中退していて、たまたま乗ったタクシーの運転手さんに優しくされたきっかけがあったことで、運転手さんの買春行為ですね。でそれによって運転手さんに優しくされただけではなくて、性交渉によってお金を頂いていたんですよ。それがきっかけでこの子はもう毎日タクシーの運転手さんを探すんですね。同じタクシーの運転手さんに会えると思って、「お金持ってないんです。で自分は裸になることができるから」って言ってまた運転手さんからお金を貰う事が度々あって、地域住民の保健師さんを通じて私に話が来ました。本人は全然悪気がないんですよね。自分の身体を使うことをね。でも一番大事なのはコンサートに行きたいとか、東京で暮らしたい。

幼少期にですね両親が離婚せれてお父さんの温もりがすごく残っているとお父さんに抱っこされて、お父さんの背中に背負われている時の気持ちがずっと残っている。お母さんはずっと深夜まで働いていて、ほとんど家にいない。で本人は独りぼっちの生活が多い。でタクシーの運転手さんに優しくされた時に、お父さんを思い出したんですね。で性衝動が抑えられなくなって初めての経験がそれがどんどん衝動的になって援助交際に発展していってお金もどんどん入るようになって、とっても本人がとっても行動としては誤った行動にどんどんつながっているんですね。でもこの子がお金がなぜかどっかから得ている事が、実はお母さんの経済的に助けにもなっていたということで、お母さんが薄々感じ取っていたんだけど止められなかった。というのが分かりました。「でもお母さん、やっぱりこの子の人生を考えたら今ここ断ち切らないといけないよね。お母さんも辛いかもしれないけど、ちょっと心配なので１回私に預けてもらえない」って事でお話をして、生活支援所になっていたんですが、治療とか含めますとね色々と応援をしました。その後お母さんが突然いなくなるんですよ。自分が悪かったと思ったことと、元々お父さんと離婚した原因がDVだったって聞いたりとか虐待があったとか聞いたりとかそしてこの子をちゃんと育てるために、日中も夜も働かないといけない、身体はボロボロ、精神的にもボロボロということで欝状態だったんですね。沖縄本土の方へ突然いなくなったんですね。音信不通で探せない状態になる時にこの子自身もどう支えていくか切り替えて自立の後押ししかないと思って、最終的にはこの子はしっかりと自分でお金を貯めて東京に巣立っていきました。目的はコンサートに行くためなんですけどもね。ジャニーズに会いたいっていう目的のために東京に巣立っていきました。

東京や埼玉で働いていた時にもそうですが、どこにでも障害がある方の性の課題は尽きないんですね。ですので、保健師さんや産婦人科の人やドクターや助産師さん、養護学校の先生方や養護教諭の皆さんとともにNPOを作りました。毎年１回２回は思春期の時期の子供さんたちその中でも躓きを抱えている方結構いらっしゃって自己肯定感をどう高めていくか研修を一緒にしながら話をしていきます。

石垣島には早稲田大学の総長にまでなられた方で大濱信泉って方がいます。もう亡くなられてますが、その方が「人の価値は、生まれた場所によって決まるものではない。いかに努力し、自分を磨くかによって決まるものである」っておっしゃってますが、私たちが関わる方って必ずしも努力だけでは中々うまくいかない方が多いように思えます。で「21世紀の主本」っていう本の中で私全部読めてないんですが、最終的にはこの方が言っているのは「生まれは家で決まる」と。で格差とか貧困とかは全部連鎖するということが書かれていますね。ですから八重山地域でもどんなでもどんな人とでも障害のある方ない方でもそれぞれ当たり前に暮らせる地域にしたいということで仕事をしているところです。これからですけども、やはり自分自身もそうですけどこの八重山地域石垣島で住み慣れた地域で最後まで終の棲家にできるようにしていきたいと思っています。



【独立行政法人 福祉医療機構 社会福祉振興助成事業】

ネットでエントリー受付中

生きにくい子ども・若者の支援についてみんなで考える

第2回 ふじのくにニッポンの縁側フォーラム

2017年1月14日(土)・15日(日) グランシップ6階 交流ホール

参加費	一般 3,000円	学生 1,000円	ファミリー 3,000円（一家族）

【おもてなし役】

ゆうたん
0才

斎藤 栄
熱海市長

津嘉山 航
(株)ゆにばいしがき
代表取締役

湯浅 誠
社会活動家
法政大学 教授

北川 聡子
社会福祉法人「麦の子会」
総合施設長

野沢 和弘
毎日新聞論説委員

申込み方法

下記HPの参加申し込みフォーム（QRコードからもアクセスできます）または、裏のFAX用紙からお申し込みください。
募集人数に達し次第申し込みを締め切らせていただきますので、お早めにお申し込みください。
http://www.kokuchpro.com/event/2016engawaforum/

主催／ふじのくにニッポンの縁側フォーラム ～やさしい街・静岡をつくる会～

後援／日本司法支援センター静岡地方事務所（法テラス静岡）、静岡県司法書士会、静岡県青年司法書士協議会、一般社団法人静岡県社会福祉士会、社会福祉法人天心会、ふじ虹の会、独立型社会福祉士事務所子どもと家族の相談室寺子屋ぉ～ぷん・どあ、一般社団法人てのひら、毎日新聞社静岡支局

お問合せ先／ engawa.shizuoka@gmail.com　http://engawaforum.tumblr.com

14日(土)

◆はじまりのごあいさつ／小長井 雅代
【ふじのくにニッポンの縁側フォーラム副代表】

講演「夕方からの人生を楽しむために」
野沢 和弘【毎日新聞論説委員】

◆活動報告
「縁側の下の力持ち 30'sその後」
ふじのくに30's

12:30～13:30 昼休憩

講演「子ども・若者の生活困窮と社会」
湯浅 誠【社会活動家・法政大学 教授】

講演「怒りとやさしく付き合う」
北川 聡子【社会福祉法人「麦の子会」総合施設長】

◆対談シリーズ
「いいから、いいから～縁側対談～」
ゲスト 川口 正義【子どもと家族の相談室 寺子屋お～ぷん・どあ共同代表】
障害者のリアルに迫る東大ゼミ

【おもてなし役】
野沢 和弘／北川 聡子／ゆうたん(0才) など

18:30～ 懇親会 イベント終了後、日本風レストラン「カフェ「ガジュ」へお誘わせ下さい

15日(日)

プログラム変更や講師の入替えがある場合もあります。どうぞご了承ください。

講演「向き合わないで生きる」
坂間 多加志【ふじ虹の会 会長】
赤渕 淳心【浄土真宗本願寺派 常願寺 副住職】
ゲスト 藤井 康弘【前厚生労働省 障害保健福祉部長】

講演「石垣島から吹いてくる風～マンゴー畑の障害者と非行少年～」
津嘉山 航【(株)ゆにばいしがき 代表取締役】

◆シンポジウム
「地域の力とは何か」
参加者 本後 健【厚生労働省 社会・援護局 生活困窮者自立支援室 室長】
齋藤 栄【熱海市長】
津嘉山 航・野沢 和弘

◆おわりのごあいさつ／田坂 成生
【ふじのくにニッポンの縁側フォーラム代表】

14日(土)18:30～懇親会を企画しております。是非ご参加ください！
会費 6,000円(お一人様) 先着50名
参加ご希望の方は、HP「こくちーずPRO」参加申し込みフォームまたは下のFAX用紙より、ご一緒にお申し込みください。

当日お子様の託児はありませんが、会場内にキッズスペースを設置します。イベント中、少しくらい泣いてさわいだって大丈夫。ぜひ、お子様と一緒にご家族でお越しくださいね！

下記にご記入のうえ、そのままFAXを送信してください

ふりがな 1.お名前 (代表者)	4.住　所
2.電話番号	5.所属団体名
3.メールアドレス	6.懇親会 (○をつけてください)　参　加　　不参加

上記用紙から申込みの場合、参加費の件などで申し込み後にこちらから一度ご連絡致しますので、連絡先を必ず正しくご記入下さい。
定員に達した場合は受付を終了させていただき、その場合申込者様へお電話させていただく場合がございますのでご了承下さい。

FAX送信先 054-265-1350　申し込み締切 1/10(火) 18:00まで

V 私の縁側論

1 わたしの縁側論

芦川咲さん
保健師

2016年9月末、青年海外協力隊としてケニアに来ました。縁側に住んでいる皆さんから、ケニアの縁側を探してきてね！と送り出して頂いてから、5ヶ月が経ちます。私が赴任したのは、首都ナイロビからバスで9時間のシアヤという小さな街。保健師として保健事務所に配属され、巡回診療に行ったり、予防接種ワクチンの配布などを行っています。職場近くの小さな平屋に住み、数十円の果物や野菜を食べながら生活しています。ケニア人と共に生活をするなかで感じたことを、ケニアの様子とともにご紹介をしようと思います。

私の家のお隣さんには5人家族が住んでいます。32歳のママ、ジョイは、病院でカウンセラーとして働きながら2人の子どもを育てています。忙しいなかでも、いつも私に夕食のお裾分けをくれたり、ケニア料理の作り方を教えてくれます。「ジョイ、いつもありがとう！」と言うと、「サキ。私たち家族とあなたは、一緒にディナーを食べているでしょ？それはもう家族なのよ！」と言ってくれました。その言葉に、温かい気持ちになりました。同じ時間に同じご飯を食べたら家族。そんな感覚も素敵だなと思います。

職場の同僚のひとり、42歳の男性のトビアスは、5人の子どもがいます。長女が24歳、第5子が5歳。最近孫も産まれました。「お金はなくても、子どもは多ければ多いほうがいいよ。だって楽しいもん！」と満面の笑みで話してくれます。そして彼はなんと、第三夫人までいるのです。ケニアでは一夫多妻の文化があるので、当然のこと。僕はちゃんと全員を愛しているんだ！と自信満々。サキ、僕の第四夫人にならない？と毎日の挨拶として求婚してくれます。日本人にはない会話を楽しんでいます。

ケニアの方は、人が自分の家に訪ねて来ることをとても喜びます。ホディ？（Can I come in?）と言ったら必ずカリブ！（Welcome）という返答。ティーを飲む？バナナ食べる？ほら、そこに座って！とお出迎えをしてくれます。長居をすると申し訳ないな、という思いは不要です。ただおしゃべりをしたり、風が気持ち良いね、と言いながら一緒に外を眺めてぼーっとします。ちょうど日本の縁側のようでしょうか。私にとって安らぎの時間です。

初めて来たアフリカ大陸、ケニア。見るもの、聞くもの、触れ合う人々、すべてが日本とは違い刺激的な毎日です。待ち合わせの時間に3時間も来ず、時にはイライラしてしまうこともありますが、それも貴重な経験。日本ではいつも時間に追われていたことを思い出します。日本とは時間の流れが違うケニアを、ゆっくり堪能していこうと思います。

2 私の縁側論

坂間多加志さん

8月24日に妻が他界し、それからおよそ一週間は、気持ちを整理する間も与えられない、あまりにも乱暴で慌ただしい時間を走らなければならなかった。弔問客が落ち着いたあたりで、私もこどもたちも「ママ」の遺影を見ながらあれこれと思いを辿る時間を得られるかと思った。しかし、実際に思いを辿るのはもう少し後になってからで、この頃は生前元気だった頃の笑顔や弾む声、泣きながら言い合いをした声、そして病室で最期に水を口に含んだ様子や薄く開いた眼などが、自分の意思とは別に突然目の前に現れた。1日に何度も切なくてたまらない思いに突然襲われた。それはこどもたちも一緒だったと思う。
朝や夕方、こどもの姿が見えないと思うと、妻の遺影の前に背中を丸めて座っている。あるときは遺影に向かってヒソヒソ声で語りかけている。あまり言葉には出さないが、その小さな体に大きな悲しみをぎゅうぎゅうに詰め込んでいるのがわかった。その姿を部屋の入口から眺め、家庭からの分離を体験したこどもたちにまた我が家で辛い分離を味あわせてしまったと申し訳ない気持ちで苦しくなり、罪を償うように（こどもたちをいっぱい幸せにしてあげなければいけない）と思った。

ずっと頭が曇っているようなぼんやり感があったので、私が妻とのあれこれを思い出すことができるようになったのがいつ頃のことなのかはっきりと覚えていない。ある夜、こどもを寝かしつけた後で妻の骨壷の前に座ってしばらく呆けていたが、ふと今日は何月何日だと思ってカレンダーを見たらその日は十五夜だった。妻が他界してから半月ほど過ぎていたことに驚いた。翌日、仕事帰りに近所のスーパーで団子を買って線香と一緒に供えた。窓の外には霧がかかっていて深い藍色に滲んだ月が見えた。

「骨壷に団子供えて月見かな」

葬儀屋が置いて行った包装紙に落書きのように書いて、（もし独りだったら、とてもじゃないけどこの切なさに耐え切れない。こどもたちがいてくれて良かった）と心から思った。

妻の遺影の前の放心していた彼らを守ってあげなければと思ったが、振り返ってみると、妻の病気が見つかってからというものこどもたちの気丈な言葉に励まされ救われてきたのは私の方だと気づいた。私と妻とこども、元はみんな血のつながらない他人だったはずなのに、いつもそばにいて人生を重ね続けることでこんなにも強く優しい関係を育むことができた。それも、一生懸命すぎるくらい正直に、ときに私やこどもたちと燃える命をせめぎ合わせながら生きてくれた妻のおかげだと思う。百か日を終えた頃から徐々にぼんやり感も和らぎ、ようやく落ち着いて感謝と謝罪を告げることができるようになった。

縁側のことについて、最後に少しだけ書く。どうしようもないくらい不安定なときに、外に出る機会（9月の縁側の会）を消さないでくれて本当に感謝している。参加するかしないかを私自身に決めさせてくれたことも嬉しかった。なかなか役に立つことができなかったが、これからも自分たちの思いで繋がり、自由なスタイルで開催できる緩やかな会であってほしいし、いつもそばにいて人生を重ね続けるような会であってほしい。

3 すべてのひとに居場所を

国枝由希歩さん

法務省保護局

社会人1年面の研修で「国家公務員としての目標を書くように」と言われたときに、私が書いた目標です。ほかの研修生たちが「公正な行政の運営」等々と書く中、一人異色の目標を書いたものだと、周りからからかわれたのを覚えています。

思えば私の人生は、ずっと自分の居場所を探している、そんな道のりだったように思います。私は確かにここにいるのに、でも私の居場所はここにはなくて、何処か別のところにきっと居場所があるはず、そんな

漠然とした感覚をずっと抱いていました。「自分」という存在に意味を見つけること、誰かに必要とされる存在になることが、こんなにも難しいことだとはまったく思っていませんでした。

そんな中、国家公務員となって、罪をした人や非行のある少年の社会内での立ち直りを支える「更生保護」の分野に身を投じ、居場所のない人、居場所を探し求めている人、自分なんかに居場所はないのだと投げやりになっている人…様々な人たちと出会うようになり、出会いを重ねるほどに居場所への思いは強くなっていきました。

家とか施設とかそういう物理的な場所ではなくて、制度を利用するとかそういう難しいことでもなくて、ほっと一息ついたり、ちょっと一休みしたり、そうやって自分らしくいられる場所をたくさんの人が見つけることができたら、それはとても素敵なことだと思うのです。

私にとっての“縁側”は正にそんな場所で、私の“居場所”になっています。

私が静岡で暮らしたのはたったの2年間ですが、その2年間で出会った人たちのあたたかさ、その出会いの尊さは、どんな言葉でも表すことのできないかけがえのないもので、いつも心の中でぽかぽかとして、動き出す力をくれています。

2年前、静岡を離れて東京勤務となり、ほとんど誰も知り合いのいない場所でただただ仕事に忙殺される日々の中、すり減るばかりの心に寄り添ってくれたのは、縁側のみなさんでした。居酒屋の扉を開けて懐かしい顔をみたとき、ほっとして涙がこぼれました。自分がしんどくてたまらないときに、一緒に泣いてくれる人がいることがどれほどありがたいことか…。「あぁ私は独りじゃなかったんだ」と気づかせてもらい、心の底からほっとしました。

場所はどこでもいい。縁側のみんながいる場所が“縁側”になる。私にとっての“縁側”は、そんな場所です。ほっと一息つける場所、背伸びをしたり見栄を張ったりしなくてもいい場所、自分の心をさらけ出せる場所。私は幸いにも“縁側”にたどりつきました。この日本に生きる人たちが、その人にとっての“縁側”を見つけることができるよう、「ふじの国ニッポンの縁側フォーラム」を通じて全国に縁側の輪をひろげていきたいと感じています。

同時に、私が私として生きていけるように、あなたがあなたとして生きていけるように、行政官の一人としてできることを模索し続けていきたいと思います。縁側でお茶を飲みながら、寄り道しながらゆっくりと、けれど確実に…。

4 私の縁側論

田坂成生さん

2年前にスクールソーシャルワーカーとして子ども家庭支援の世界に飛び込んでから、子どもと接しながら半世紀も前の自分の子ども時代を思い起こしてみることがよくある。

子どものころ、自分でも気付かないうちに様々な壁を乗り越えていたんだなあ。また、乗り越えられずに皆が背中を押してくれたなあ。あの時傷ついたことで、今でも自分を抑えてしまう引っ込み思案な面を引き摺っているなあ・・・等々。

しかし、現代は私の育った当時よりはるかに複雑で厳しく、家庭も社会も余裕が無く、家族や地域の絆も希薄となった。それを埋めるべくもなくネット通信やゲームの虚構の世界が蔓延し、現実から逃避しているようにも見える。

現代社会に生きる子どもたち、かつてない育ちの環境により、どんな価値観を持った人間社会が形成されるのだろう。

生命、感動、愛情、信頼、希望が豊かに育まれる社会が実現してほしい。

すべての人は自分の生まれ育ちの場を選択できないが、たとえ何かが不足する環境であっても、それを成長の過程で補える社会であってほしい。多くの人と人との現実のつながりをとおして、自らの軌道を修正する勇気を与えてほしい。

世の中はどんどんスピードアップし、その流れに乗らなければならないと思うストレスがいやおうなく襲

い掛かる。しかし、こころの成長はもっとゆっくり、穏やかな流れの中で進んでいく。私たちの社会は、人間無視、こころの成長を置き去りにした経済成長偏重社会の影響はどんどん深刻化している。

縁側フォーラムの趣旨は、「ちょっと休んで日の当たる暖かい縁側に腰掛け、お茶を飲みながらそこに居合わせたいろんな人たちとゆっくりお話しましょう。」

真剣な討議の場ではなく、ゆるーい、こころの休憩時間。「山ほど背負っているものをちょっと下ろし、周りに目を向けて見ましょう。こころにも休憩時間が必要です。」

現代の人間社会のゆがみにバランスをとるように、各地で活動し、一石を投ずる仲間たちとの出会いと感動の共有の場だと思う。私たちの思いは、人間らしく、自分らしく。

日々の生活の喧騒の中にあっても、耳を澄まして「こころの叫び」に耳を傾けたい。

5 私の縁側論

望月浩世さん

私は現在子どもとかかわる施設で働いている。この仕事を長年やっていてようやく気付けたことがある。そこにはいろいろな考えや思いをもった子ども、保護者がいる。どの子もどの保護者も日々「よりよく生きたい」と考え、生活している。その考えや思いの中に「こうあるべき」「こうしなければ」という無言の呪縛に囚われていないだろうか。以前の私には、それが当たり前の社会だと何の疑問ももたなかった。というよりもそれが「当たり前」と思えない自分はむしろおかしいのではないかとさえ思った。しかし、世の中で日々「よりよく生きたい」と願いながら生活している人それぞれの思いを理解しようとしていなかったのです。そもそも私自身が自分の「ものさし」で物事を計っていたことにさえ、気づいていなかったのです。そのことに気付かせてくれたのが、「縁側」といういつでもどんな時、どんな人でも「いいよ、おいで。」と受け入れてくれる場だったのです。それから、傲慢ではあるが、私の世界は広がり、毎日子どもたちや保護者から学ぶこと、教えられることがたくさんでてきたのです。人は、どんな考えや思いをもっていたとしてもまずは安心、安全に受け入れてもらえる場があることで、心を開放され、本当の自分の思いに気付いたり、素直になったりできるのだと思うのです。

「北風と太陽」の話のように、ぽかぽかした温かな場があれば、自然と心を許せるのではないでしょうか。確かに枠にはまる人、はめることができる人は、都合の良い人です。しかし、それでは本当の意味で相手を受け入れたとは言えないのではないでしょうか。むしろ独りよがりだと私は考えます。

いつでもどんな時でも「いいよ、おいで」と言えるあたたかな（ぽかぽかな）心をもった縁側のような人になれるようぐにゃぐにゃにできる柔軟な「ものさし(心)」をもちたいと考えています。

6 私の縁側論

小長井雅代さん

2016年4月3日午前9時7分、満開の桜の下、赤ちゃんが誕生しました。

2015年8月、命が宿ったことが分かってからも、仕事やその他サポーター活動、習い事や趣味、縁側の活動…と今までと変わらず、目いっぱい予定を入れて過ごしていました。とつきとおか、せわしなく動くお母さんを感じながらお腹の中で元気にぐるぐる動き回っていた赤ちゃん。ポコポコと力強く動くのをいいことに、赤ちゃんに向き合う時間をおろそかにしていたのかも知れません。私のしていた仕事は1年ごとの採用で、予定日が4月ということはどれも年度いっぱいで整理しなければいけない、やれるだけのことはやろう、

そんな気負いもあったのかも知れません。兎に角、今、妊娠中にできることをやらなくてはと体と赤ちゃんの声を大事にしていなかったのかなーと思います。妊娠経過は順調でしたが、最後の最後、妊娠37週の健診に行った3月26日土曜日の朝、それまで通っていたクリニックでは産むことができないと告げられ、総合病院を紹介されました。午後、昨年度最後の縁側の会を終え、翌週月曜日に総合病院を受診、火曜日に入院してからは、お腹にモニターを付け、赤ちゃんが早く産まれてくるようにとお薬や点滴をして、毎朝病室からLDR室に出勤し、産まれるときを待ちました。私の体を心配し、「いい加減ゆっくり休んで」と赤ちゃんが休息時間をくれたのかな等と押し寄せる不安を無理やりいいように転換したりして、でも、その間も、3月中に終えなければいけない支払い処理や、報告書等の納品連絡をし、「一段落するまで待ってね」なんて自分勝手な声を掛けながら入院生活を送っていました。そんな状況でも赤ちゃんは律儀に母の言いつけを守り、すべての事務処理を終え、先生から「土日は点滴をお休みして、また来週からがんばりましょう」と言われていた日曜日の朝、自分のタイミングで産まれてきたのでした。なるべく医療の介入なしに産みたかった私ですが、現代医療に助けられてのお産でした。さらに入院中は、主治医の先生や助産師さん、看護師さん、たくさんの医療スタッフが支えてくださって、母子とも無事に退院することができました。入院する前はまだ咲いていなかった桜も、産まれるときには満開となり、退院するときには散り終わりで、お腹の赤ちゃんの胎動を感じながら桜並木を散歩するという夢は叶わず、退院してからの1か月はそれこそ繭の中にいるような、ふわふわとした不思議な日々でした。妊娠期から退院するまであんなにも関わってくれていた医療スタッフはおらず、おっぱいは足りているのか、呼吸はしているのか、この子をひとり寝かせて、私はどのタイミングでトイレに行ったり、ごはんを食べたりしたらいいのか、乳幼児突然死症候群がやたら怖くて突然死んじゃうんじゃないか、そうかと思うと赤ちゃんて何てかわいいんだろうと涙が出てきたり、大げさだけど、生と死の間の世界にいるような感覚でした。入院しているときに、「産後は特にホルモンバランスが乱高下して、感情が不安定になるのは当たり前だよ。みんなそうだよ。学んできた私だってそうだったんだから大丈夫だよ」って助産師さんがおしえてくれたのを思い出して、「あぁ、大丈夫なのかな」ってふわふわ朦朧としながら感じていました。お産をめぐるあれこれがこんなにもしんどいなんて思いもしませんでした。そして、朦朧とした感覚の中で助けられたのは、やっぱり縁側でゆるゆるしながらも本質的にはとんでもなく優しい仲間、そして一歩先行くママたちでした。「赤ちゃんて生きてるだけで花丸だよ、これからどんどんかわいくなるよ」って本当にその通りです。あっという間にもうすぐ1歳。一緒にいる時間を紡ぎ続け、ますますかわいくなっています。そして、縁側に参加する子どもたちに「縁側に来てくれてありがとうね。あなたたちは宝だよ」と言ってくれるみんな、ありがとう。

縁側。年代や職種や肩書を脱ぎ捨てて、ぽかぽかひなたぼっこしながら、日々の喜びやせつなさや、弱さやもろさ、強がりやちっぽけなこと、丸ごとの自分で何かを感じてもらえるといいなと思います。

7 私の縁側論～自らの営みの功罪を自覚すること、そして希望

川口正義さん

独立型社会福祉士事務所 / 子どもと家族の相談室寺子屋お～ぷん・どあ共同代表

船舶工学を学んだ後、福祉の世界に。24才で児童養護施設の現場に入り、その後、民間教育機関を経て、1989年に相談室を立ち上げ、現在に至る。2008年からは静岡市教育委員会、2016年からは静岡県立静岡中央高校のスクールソーシャルワーカー、2012年からは“「こども・若者・女性の貧困」対策＆「家族の機能不全・貧困の世代間連鎖」予防事業”を開始し、2015年に「一般社団法人てのひら」を設立。2014~2015年は静岡乳児院にて実践…等々。かれこれ36年間、ソーシャルワーカー（以下、SWr）として生きてきたことになる。

私のSWrとしてのアイデンティティは、独立型社会福祉士としての実践にある。この間、さまざまな生活課題を抱える当事者の方々との出逢いがあり、多くのことを学び、それらが私のソーシャルワーク（以下、SW）実践の中身を形作ってきた。彼・彼女たちとの出逢いがなければ、私は今、ここで、SWrを名乗ってはいない。その一方で、私は常に自戒しつつ、自問してきたことがある。「自問的命題」と名づけている。

Q.SWrとは、誰のために、いかなる営み（支援）をする人間のことを言うのか？
Q.援助専門職は当事者に対して「支援」（援助）をすることが、果たしてでき得るのか？
Q.当事者を支えることができる支援システムとは、いかなるものなのか？

今もなお、「SWの迷宮の森」から抜け出せないでいる。そして、日本のSWやSWrを名乗っている人間のあり様に憤りを抱いている。その憤りは哀しみと背中合わせである。日本の福祉やSWを取り巻く時代社会状況の行く末に「希望」は見出せるのだろうか？

福祉市場への競争原理の導入。事業者が利用者を選択する現象とサービスの定型化。採算性、効率化、成果主義の優先。社会福祉制度の開発、拡充、統廃合（制度そのものの仕組み）によるソーシャルワークの援助過程の限定化、分断化、変質化。「自立への努力義務」「自己責任論」の強調。“援助の主人公”としての当事者の放置、切捨て、及び当事者の訴え（ナラティヴ）の黙殺…等々。挙げたらきりが無い。

そのなかで、確実に当事者（利用者、クライエント）の援助専門職に対する眼差しは、冷たく厳しいものとなってきている。そして情けないのは、そのことに気づいていないSWrたちが増えてきていることだ。そう感じ危機感を抱いているのは、私だけであろうか？

私は、援助専門職たるSWrが他者である当事者を理解することはできない、と思っている。しかし、理解するために“近づく”ことはかろうじてできるかも、と考えている。そこに「支援」の可能性が秘められている。また、私はそもそもSWなる営みとは「罪人の運動」であり、またSWrとは「当事者を傷つけながら生きる人間」であると認識している。SWrとなってから私が大切にしている（いや大切にしたいと思っている）「Start where the client is.」なるスタンスを、理屈ではない具体的実践として多少なりとも具現化でき得たとき、一抹の楽しさ・醍醐味を感じる。そしてそれは「他者を支援する営みの怖さ」と裏表の関係にあるものに過ぎない。

「支援」とは、目の前の当事者一人ひとりの呈する具体的現実と対峙し、当事者に対する日常的なSW実践の積み重ねの上に成り立つ営みに他ならない。そして、その営みは「リスク」を伴うものでなければ意味はない。「目の前の当事者一人ひとりの呈する具体的現実」の重さを目の前にし、私は狼狽え、怯え、苦悩し、揺れ動く。無力である。でも、SWrをやめることができずに今に至っている。何故なのだろう？　さらに自問する。

小長井雅代という一人の女性の“自然な発露ともいうべき思いつき”（笑）によって、「ふじのくにニッポンの縁側フォーラム～やさしい街静岡をつくる会～」が誕生した。そして、一人また一人と、さまざまな属性を有するユニークな仲間が集まってきた。彼･彼女たちには共通する特徴がある。それは、皆、既存の制度･サービスの枠のなかでは当事者を支えることはできないという現実と対峙するなかで、自らの葛藤する思いをエネルギーに換えて新たな支援のためのネットワーク＆システムを創り出したいとの夢を抱き、そのための行動を模索しているスタンスである。そこに私は心地よさを感じ、その道程に価値を見出し、その行く末に希望を抱いている。

私の座右の銘の一つ。「思っていても変わらない。始めなければ、始まらない」。「縁側」に参画する仲間たちと一緒に活動する時間が織り重なっていくその先に、この時代社会状況を変革していく“何か”が始まっていくような気がしている。いや、もう始まっているか。みんな、ありがとう！　これからもよろしく！

8 私の縁側論

川島裕子さん

縁側フォーラム、簡単なお手伝いのつもりで仲間に入った私ですが、2年連続で大勢の方が参加するフォーラムの実施にも参加することができました。

昨年度よりも今年度は、より縁側を感じられた2日間だったような。それは、ちびっ子たちの活躍があったからだと思います。あまりセミナーなどでは見かけない、子ども達の存在は、縁側の目的、な~んにも区別のない集まりに近づけたような気がしました。

私は、その中でも、会場の片隅で、ちびっ子スタッフさんたちと、壇上の講師の方々のお話しを、リラックスした気分で聞いていました。当日のアンケートの中にも、「会場にいるお子さんたちと交流を持ちたかった。」なんて意見が出ていて、子どもの存在の大きさを感じました。
縁側を想像すると、みんなが日向ぼっこして、お話しを楽しんでいる絵が浮かびます。来年度以降もそんな縁側を実施できたらいいなぁと思います。いつかは、屋外で縁側フォーラム・・・実現できたら面白かな。

9 私の縁側論
長房絵里さん

縁側フォーラムには昨年の第１回から関わっています。昨年は、才色兼備な咲ちゃんと一緒に慣れない司会をやらせてもらい、色々手探りでしたが、今年は咲ちゃんが不在のため新たに全く福祉と無関係の夫を縁側に道連れして司会などのお手伝いをしてもらいました。普段仕事以外で出会いの機会も少ない男性にとっては、いい刺激になるかなと思い誘いましたが、実際その予測はおおむね正解でした。
今年は昨年の経験もあり、茶娘の衣装にもなれて、少し余裕を持ってフォーラムを楽しめた気がします。新たに加わったかわいいキッズ達との司会はとても場が和み、一緒にやれてとても良かったなと思います。縁側フォーラムのゆるく流れる場の空気感は、やはり子ども達の醸し出す自由なものが大きかったようです。普段はフォーラムというと、固く真面目なものという印象が強く敷居が高い印象ですが、やっていること、お話している内容はとても真面目なものでも、場の空気がゆるやかだと頭もやわらかくお話しが入ってくるような気もします。それはありそうでなかった形だと思います。様々な活動を通して活躍されている方達の熱いお話を聞き、実際に近くで交流できる敷居の低さは縁側の特徴だと思いますが、そんな気軽さがないと関係者だけが集まるよくある福祉系フォーラムと変わらないので、専門分野以外の人にも気軽に入れる敷居の低さ、ゆるさはとても大切だと思います。
これからもじわじわと自分たちのペースで続けて広がっていけばいいなと思っています。ありがとうございました。

10 私の縁側論
長房孝治さん

これまで私は、福祉や介護、といった世界には全く門外漢で無縁の者でした。
妻に誘われて縁側での講演を聞きはじめましたが、携わっていられる方がいろんな問題に高い志をもって取り組んでいられる姿をみて、大変勉強になっています。ふだんなかなか出会わないような方々のお話を伺っていると、周りや地域をうまく巻き込んで仕組みをつくられたり、問題解決にあたられたりされている面は、自分の仕事にも生かせるのではと参考になっています。
その道のスペシャリストのお話も聞きながらも、敷居は低く、いろんなお話もできて交流できるところも、縁側の会の魅力だと思います。
まだまだわからないことも多いのですが、これからもお手伝いできればと思います。

11 私の縁側論
福貴稔さん

今年度行われた第２回ふじのくにニッポンの縁側フォーラム。
沖縄は石垣島から静岡へ来られた津嘉山航さんの講演の中であった赤瓦の家の写真。
庭には近所の子どもやお年寄りが勝手に集まってくる縁側があり、その光景が各地に広がっていければどれだけすてきなことなんだろうと感じました。ハード面で縁側があることはもちろん居心地の良いものだと思いますが、それ以上に大切なソフト面、人や繋がりその場に漂う空気、目には見えないかもしれないけどとても大切なものにあらためて気づかせていただきました。
ふじのくにニッポンの縁側フォーラムに参加して静岡県内だけでなく全国各地から素敵な実践を行われている方々や枠組みを作られている方々の話を聴くことができ本当に貴重な機会を与えて頂いています。話をされた皆様、社会や地域の課題を我が事のようにとらえ取り組みをされており今後の地域に必要な「我が事、丸ごと」の視点、制度が作られていく過程で誰のための何のための制度なのか「当事者優先」の視点など言葉でいうのは簡単ですがそれを実践している姿に毎回感銘をうけました。
話は変わり自分も社会福祉士として日々仕事をしている中で、縁側フォーラム研修後は反省の日々を送っています。成年後見の活動では施設に入っていればお任せしてしまい、被後見人の想いを汲み取っていなかったり、在宅の方では忙しさにかまけて財産管理しかしていなかったり・・・また日々の仕事でも相手の想いに身を寄せているような気持ちになって自分よがり（わがごと）の支援になっていたり・・・往々にしてあるとは思いますが「当事者優先」ではなく「支援者優先」になっていることに気づかされます。
そんな反省の日々の中でも今年度はふじのくにニッポンの縁側フォーラムを通し新たな活動もできました。刑務所を満期出所された方を福祉制度に繋げられたり、山間地の高齢者が集える居場所活動ができたり、一番うれしかったのは共通の趣味を持つ不登校の子どもとひきこもりの若者とが集える場所を作りお互いが化学変化を起こして、学校復帰したり、仕事を始めたりしました。他人の人生に影響を与えられたり、自分も影響を与えて頂いたり。双方向の関係性の中で人生の素晴らしさを学ばせていただいています。
内でもない外でもない　理由があってもなくてもいい
そういう居場所がたくさん増えるような社会を目指して生活していきたいと思います。

12 私の縁側論
山内健生さん

「優しいまち」をつくる。そんなことを考えてみたら・・・。
「優しい」とは、理論や正論を突き通すことが正しいことでないときもある。分かっていても見守ることが必要なときもある。つまり、相手の立場を共有しながら共に歩んでいくという志なのではないかと考える。人はそれぞれの立場で問題をかかえると当事者になる。困ったときや苦しいとき、嬉しいときに理解や共感しあい自然と手助けする関係が必要となる。だからこそ、日本家屋の特徴である縁側は、公私で割り切ることをせず、「人と人」「人と地域」が繋がる大切な役割を担っていた。
人は、頭では理解できていても心で共感するまでは時間がかかる。社会が理解・共感するために先人の当事者の人たちは「当たり前」の枠組みを見直す活動をして新たな文化をつくった。
今後は「当たり前」の枠組みを見直し、誰しもが当事者になる時があることを社会で共有することが重要である。そんな社会を創造することが新たな文化の創造に繋がると考える。
それが「優しいまち」をつくる手がかりであるように感じる。
色々と考えたが、これが今、私の考える「縁側論」である。

Ⅵ アンケート結果

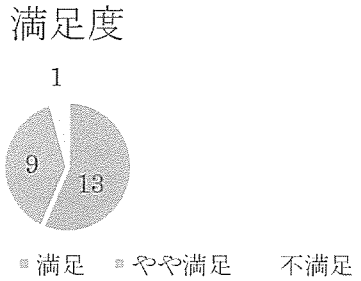
1 相模原事件を考える

2017.2.25　成年後見利用促進法

アンケート提出者・・・25名

(1) 研修の内容全般について、ご満足いただけましたか？

①とても満足13名　満足9名　やや満足0名　不満足1名



(2) どの点が良かったですか？

①役立つ情報が得られた　・・・21件
②日頃の生活や活動に役立った・・・7件
③他の参加者との交流・情報交換が図られた・・・0件
④スキルアップにつながった・・・8件
⑤抱えていた問題・不安の解消につながった・・・0件
⑥その他・・・7件

- 制度を作ってきた人から直接話を聞けてよかった。
- 現場で活用できる情報や研修会等で、スタッフと共有できる事案がたくさん得られた。
- 仏教のお話がめずらしくて興味が湧いた。後見のことは、もっと勉強しようと思った。
- 自分の整理のつかない気持ちに拍車をかけられたようであった。色々な視点や考え方を知らされた感じだった。後見については、息子の補助人になっている。今後の変わっていく形を（後見制度）しっかり把握していこうと思った。法人後見がすすみますように。
- 熱い想いと、静かな想いが交互に湧いてきて、本当に不思議な満足感があった。
- 考える機会となった。
- 成年後見制度のことがよく理解できた。

(3) どの点が良くなかったですか？

①役立つ情報が得られなかった　1名
※その他回答なし

(4) この研修を知ったきっかけは何ですか？

①主催者からの情報・・・9件
②ホームページ・・・1件
③友人・知人から・・・8件
④フェイスブック・・・2件

⑤その他・・・5件

(5) 講師・スタッフへのメッセージ

・遠くから参加させていただいたが、来てよかったです。若い静岡の皆様の熱い想いが、うらやましく感じました。

・曽根先生には今回の我が家の社会福祉法人とのストラグルには大変お世話になり有難うございました。弁護士、社会福祉士、司法書士のカテゴリーに分けて考えるのではなく、人間性ということに痛感しております。

・日本全体にこの活気が結びつくのではないかと感じました。熱海も参加させてもらいます。

・ネットワーク作り、システム、人材育成と、福祉には課題が山盛りです。こうした会に出て、皆さんの前向きな姿を見ると、糸口が見えてくる気がします。

・途中、子供連れの家族を退出させようとする人がいたので、嫌な気持ちになりました。色々な考えがあると思いますが、心を痛めました。

・心のバリアフリーを実現するのは、どこがどのように考え、どんな行動をすべきか。教育は、宗教は、政治は？相模原事件のあと、例えば首相とか、厚労省とか、文科省が、国民に声明を出すようなことがあっても不思議ではないと感じました。静岡市では市議会で決議をだそうと動いた市議が、多数会派に働きかけ時、若手議員が乗りかかったのを、ボス議員がつぶしたという話を聞きました。

・住職のお話が時間のせいか語り切れていないと感じました。余白がいいのでしょうか。

・静岡市では、平成27年度、障害者について市長申立は0件でした。市長申立は誰ができるのかについては、ホームページで公開されていないです。

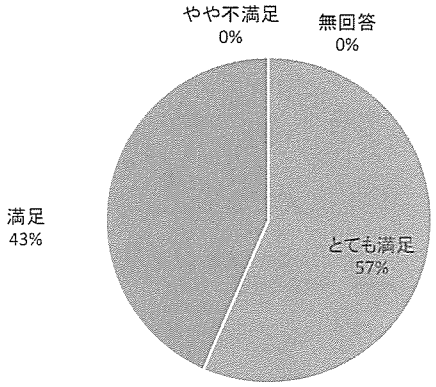
・このフォーラムの主旨を理解していませんでした。

2 みんなで暮らす

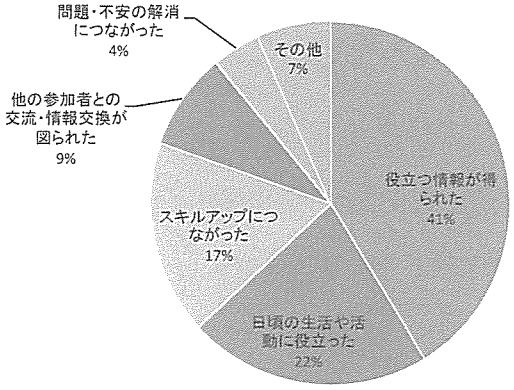
2016.7.3　司法書士会館

アンケート提出者・・・23名

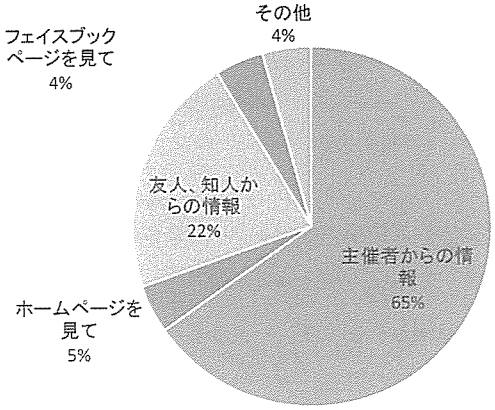
勉強会の内容について満足いただけましたか



どの点が良かったですか（複数回答可）



この研修会を知ったきっかけは何ですか（複数回答可）



講師・スタッフへのメッセージ等

・こんじまりと言われていたが、100人もの方の生活をみることは大変だと思う。

・いつも素敵な研修をありがとうございます。今後のぜひ参加させてください。いつも楽しみにしています。

・日頃悩みつつ、日々の業務に流されがちになっていることについて、改めて考えるきかっけとなりました。

・今回も大変楽しいフォーラムでした。

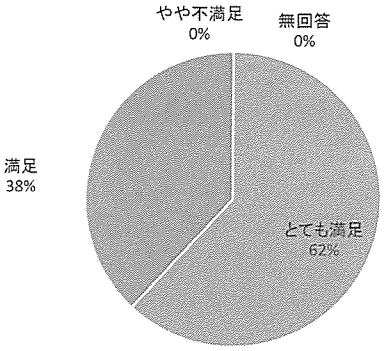
・参加2回目ですが、自分の視野が広がるお話しを聞け、楽しいです。

3 里親・養子縁組を考える

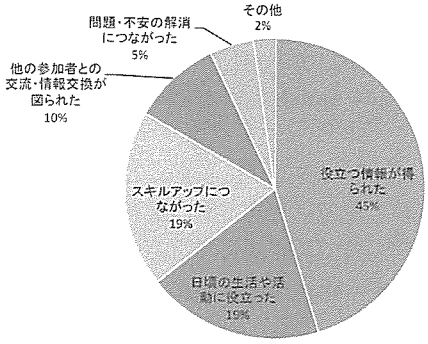
2017.9.10　静岡県産業経済会館

アンケート提出者・・・21 名

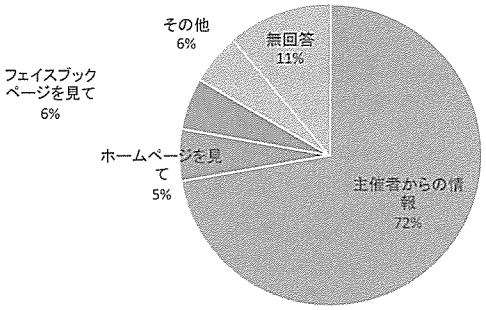
勉強会の内容について満足いただけましたか



どの点が良かったですか（複数回答可）



この研修会を知ったきっかけは何ですか（複数回答可）



講師・スタッフへのメッセージ等

- すばらしかったです！心がゆさぶられました!!
- 野沢さんいつもありがとうございます。最後のお話し（いつもですが）感動しました。
- 自分の家族の顔が浮かびました。教え子たちに会いたくなりました。参加できてうれしかったです。ありがとうございました。
- 貴重なお話しが聞けて、大変ためになりました。機会をつくっていただいてありがおうございました。
- 毎回、自分の価値観がゆさぶられ考えさせられます。人間としての成長に結び付けられたらと思います。今後ともよろしくお願いいたします。
- 中・高から里親に興味があり、今でも里親になりたいと思っています。

その他の意見

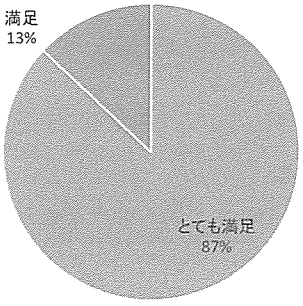
- 講師のお顔が見えなく、少し残念でした。
- 他の参加者との交流、情報交換がしたかった。

4 ひろう・つなぐ・まもる～罪に問われた若者の支援

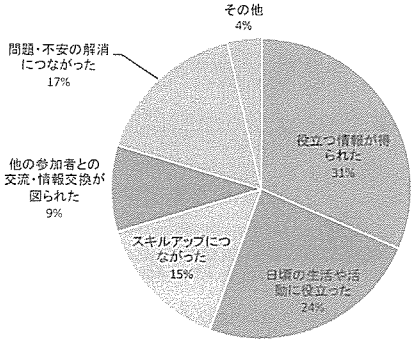
2017.10.8　あざれあ

アンケート提出者・・・23 名

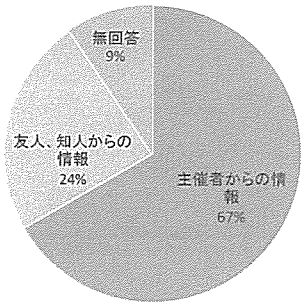
勉強会の内容について満足いただけましたか



どの点が良かったですか（複数回答可）



この研修会を知ったきっかけは何ですか（複数回答可）



その他　具体的に良かった点

- 夢・希望に満ちたお話しでした。
- これからの子どもの支援に非常に参考になりました。人の想いや関係性がその人の支援につながるという話は、本当にそう思いました。
- 希望が湧いた。自分のできる事をやりたい気持ちが高まった。
- 仕事がらとても共感でき、内容の濃いお話しを聞かせていただきました。時間はかかりますが、一人ひとりの個性と丁寧に向き合っていきたいと思いました。
- 草刈さんの話に感動した。辻さんのメッセージにパワーをいただいた。

講師・スタッフへのメッセージ等

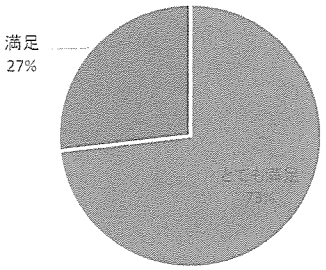
・少年たちとの関が話題豊かで参考になった。
・人の周りにいる人がどんな人かが大切。その人にとって引き出しの一つに入っていられる自分でありたいと思います。
・まさにほっこりとするテーマのお話しを聞けて感謝いたします。
・すごく考えさせられるお話しを聞けて、参加してよかったです。
・子どもの養護の仕事をしています。生まれた時から犯罪を起こしている子は一人もいません。加害者を生まない子育て支援を続けたいと思います。職場ではマニュアルにとらわれて必要以上の子どもとの関係づくりは必要ないといわれています。職員は決められた時間の中で子どもの身の周りのお世話をするのみ。今日のお二人のお話しを聞いて、関係性の構築が重要だという事を再認識しました。私は私のできる範囲で子どもとの関係性を深めていきたいと思います。養護施設を出る子どもと、刑務所を出る人、どちらも社会に出る不安が同じだと、重なる部分を感じました。施設出身者が定職に就くことは厳しく、社会の中の陰の部分に置かれるもの、あるいは何らかの犯罪をおかしてしまう者も少なくありません。自立（人を頼って生きることができる、人に頭を下げることができる）する力をつけさせてあげたいと思います。

5 第２回ふじのくにニッポンの縁側フォーラム

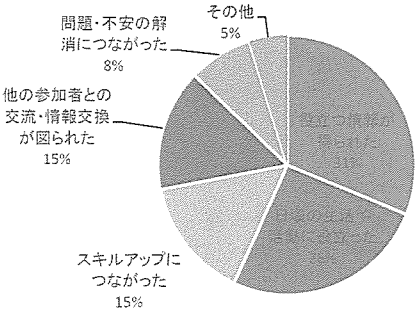
2017.1.14 ～ 15　グランシップ　交流ホール

アンケート提出者・・・56 名

フォーラムの内容について満足いただけましたか



どの点が良かったですか（複数回答可）



その他　具体的に良かった点

・湯浅氏のリーダー（まちづくり）としてのソーシャルアクションをここにいる皆さんならできる。との言葉に勇気づけられた。地元に戻り、地域貢献できる支援団体を立ちあげたいと考えています。坂間氏のサーティーズともつながりたいと思っています。
・もやもやしている思いを登壇していた講師の方が言語化してくれ、スッキリしました。
・良いお話しをたくさん聞かせていただきました。
・違う立場の人の問題の中に共通の課題や気持ちを感じることによって、社会全体の中でどんな考え方を持ったらよいかについて、大変参考になった。
・生きる力がついた
・自分の知らない分野でのお話しを聞くことができ、とても参考になりました。
・2 日目が良かった。
・皆さんの精力的な活動に刺激を受けました。
・あらためて広い視野で考える機会をいただきました。
・専門職がいかに「当事者」というくくりで相手を障がい者にしていたか・・・胸が痛みました。
・日々の活動の実践が素晴らしいのはもちろん、当事者への目線や距離の自然体さを目の当たりにして元気がでました。
・あたたかい気持ちになれた

特に印象に残った点について

・「我が事」「丸ごと」の言葉に、ほほ～納得‼でした。もっともっと「我が事」に捉えて、気づいた方が目覚めていけば、社会はもっと温かく、優しくなっていくんだろうなと思いました。まずは、自分から！目の前の事、人と丁寧に向き合っていきたいと思いました。
・大学生のスピーチはよかった。サークルかも知らないが、できれば、公開市民大学の形も年 1 回ぐらい開催して、若者と地域と障害者との交流の場を作ってほしい。野澤さんの実話には涙しました。
・東大生のリアルな姿を見ることができ、夜、お話しできて、本の中の思いをより深く感じました。
・最近の国の動向やそれぞれの地域での取り組みなど情報が得られた。
・様々なお話しや取り組みについて聞かせていただき、とても勉強になりました。制度にとらわれず当事者にとって必要なものに取り組んでいく行動力、人とのつながりの大切さ等々、改めて大切なところんい気づかせていただきました。
・ユニークで温かみのある中で深く熱いお話しをお聞きすることができ、とてもよかったです。当事者のニーズ、望むことを第一に。できるできない事を考えるのではなく支援にあたっていきたいです。
・我が事、自分事として捉える考え方。「障害者を福祉サービスで支える」ではなく、皆、困った人を地域（そこにいる人）で支えるの考え方が

一貫していたように思います。
・一日目、最後の川口さんの言葉。
・特に私どもの今後の活動の中で、里親さんから卒業した子どもたち、アルコール依存症者の救済事業、居宅確保から資格取得、就労支援を実施していくうえで大いに勉強させていただきました。
・熱海市長の話。
・ 会場がそのまま縁側だった。
・ 受付で小さなお子さんが対応していてとても印象的でした。
・ 温かい雰囲気のフォーラムで講師の方の話を聞きながら、自分の課題でできることをわくわくと考えることができました。「向き合わないで生きる」が印象に残っています。常識や人からの～べきをうのみにするのではなく、その時その時の目の前の人をよく感じて、自分にできること、地域でできることを増やす行動をしたいと思いました。
・ 最後の子どもたちのごあいさつ、涙が出た。
・ 他人事ではなく我が事という言葉が印象に残り、福祉人である前に１人の人間として大事にしていきたい言葉となりました。
・ 縁側風の対談が面白かったです。たくさんの方の前で自分の話をさせてただいて、とても貴重な経験となりました。
・ みかんを食べながらがいいですね。
・ 今の世の中、ハンディのある方といわゆる健常者（児）とのくくりは残念ながらある。みんな一緒にと考えながらもくくってるのが現状であり、福祉に携わる人の中でもそういう考えをしている人も多い。寄り添っている・・・と言いつつも壁になったり引っ張ったりしている、確かにそうだと思った。今そういったお子さん、親御さんと関わっている中で、もう一度自分の立場と関わり方について身上に大切にしていかなければと感じ、また自分の責任の大きさも踏まえ（影響も踏まえ）改めて考えていきたい。
・ 野澤さんのお話しは深く感動でした。地域のママさんたちの活動を広めるべきで、児童相談所の時代ではない。
・ アットホームで楽しい雰囲気でした。ステージだけでなく、参加者も縁側感があるとうれしい感じがします。
・ 子どもが運営・進行していることが印象に残った。参加しやすい。
・ ここ数年「向き合う」「寄り添う」という言葉に都合が悪くなると逃げていることに気づき、なるべくこういた言葉を使わずに接していこうと心がけています。今回「向き合わないで生きる」という言葉に惹かれ、楽しみにしていました。宿題が残るものになりましたが、私が違和感を覚えた「向き合う」「寄り添う」は支援者のひとりよがりであり、支援者の自己保身から発するものだったことを改めて感じました。
・ 全体のプログラム構成が素晴らしく、ひとつひとつ課題に気づき、糸口を見つけ、整理されていく。そんな気持ち良さがありました。
・ 会場全体がソーシャルインクルージョンを実現していたことに感動しました。
・ 川口さんや坂間さんの思いの強さに励まされました。
・ いろんな分野の専門家が集合し、いろんな意見が聞けて良かった。アンガーマネージメントのことはとても興味深く、ケアする人へのケア研修もしていきたいと思いました。多様性を認め合う社会づくりをしていく、それは、私たち福祉支援をしている人がやっていくスキルがあるんだよと言われたこと。

講師・スタッフへのメッセージ等

・ 講師、スタッフの皆様、準備から当時まで大変お疲れ様でした。毎回たくさんの気づきをいただけて楽しみにしております。気づきを行動に移し、微力でも地域のために生かしていけたらなぁと思います。
・ もう少し「生きにくい子ども」に的を絞った内容であってほしかったです。支援という視点より、福祉としての視点が強く感じました。生きにくい＝障がい者となりそうな内容でした。
・ すばらしい会でした。人が人を呼び、さまざまな職種の方々が福祉に特化して集中し、講演を開いてくれる。この形を広めたいですね。このような形を各市町でしっかり若者がリーダーシップをとって開催してうゆける「力」（ネットワーク）を作りましょう。そして、全市町の合同フォーラムを開催してください。川口さんすごい。このような話が聞きたかった!!子ども食堂の話もその通りだと思う。声なき声を聴くことの大切さ。目線は低く・・・。居場所づくり。しなければなりません。
・ 司会進行もとても可愛らしかったです。
・ 子連れで参加できたので良かった。
・ 今回のような素晴らしい講師がそろう研修はなかなか地元ではないので、参加させていただき良かったです。
・ 市民の一人として、縁あって参加させていただいています。具体的に何ができるかわかりませんが、身近なところで自分ができることで関わっていけたら、人とつながっていけたらと思いました。
・休憩時間に小さな子どもたちと、ちょっとした遊びのコーナーああると、セミナー全体の雰囲気がより一層和らいで良いかなと思いました。
・これだけの内容のフォーラムを開催できるスタッフのみなさんの力に頭が下がります。かかわる分はそれぞれでも、みなさんの思いは一つなんだなと強く感じました。静岡を愛する一人として、社会の一員として、私も私が生きていく場で縁側を作っていきたいと思いました。
・先日、神奈川県で自立援助ホームを営んでいる前川さんの話を聞かせていただきました。私たちは日頃、子どもたちの支援に従事し、生活力や進路指導等、一所懸命子どもと関わっているつもりでしたが。大事なのは子どもが「生きよう」と思えること「生きていいんだ」と思うえることだと教えられました。「生きよう」と思った子どもは大人が何も言わなくても行動を始めるとのこと。衝撃を受けるお話しでした。
・自分自身も１歳と３歳の子がいるが、その子どもたちが将来生きやすい社会を作り、その子たちと同世代の子どもたちが生きやすい社会を作っていきたいというところに共感しました。
・坂間さんへ
二人のお子さんに「よく聞こえる声でとてもわかりやすかったです。ありがとう!!」とお伝えください。愛されて育っておられることがにじみ出てらっしゃいますね。これからの成長が楽しみですね。
・内容はきちっと濃いものにも関わらず、縁側のゆるい雰囲気もかもし出していて、温かい気持ちが残るフォーラムでした。若者の活躍もあり、未来への希望を感じるものでした。
・縁側をあたためる太陽に、子どもスタッフはじめ皆さんがなって下さっていました。
・とても充実したフォーラムでした。いろんな方のコラボがいいいなぁと思いました。司会の子どもさん、会場づくり、講師の方々、すべて温かい雰囲気でいいなぁと思いました。

①会場にはキッズスペースも設けられ、子どもたちも含め、多様な職種、立場、年代の人たちが参加した。②講演の間には「障害者のリアルに迫る東大ゼミ」の学生たちによる活動報告も行われた。③「子ども・若者の生活困窮と社会」をテーマに講演した湯浅誠さん。④「怒りとやさしく付き合う」をテーマに講演した北川聡子さん。⑤多様なゲストを招いた「縁側対談」。縁側のお茶飲み話のような雰囲気の中で楽しく語り合った。

Close Up クローズアップ

ゆるやかであたたかいつながりの中から

ふじのくにニッポンの縁側フォーラム

1月14日、15日の2日間、静岡市で「ふじのくにニッポンの縁側フォーラム」というイベントが開催された。さまざまな分野や立場で若者や子どもの支援に携わっている人たちが集い、情報を共有し、語り合った。

フォーラムのテーマは「生きにくい子ども・若者の支援についてみんなで考える」。主催の「ふじのくにニッポンの縁側フォーラム～やさしい街・静岡をつくる会」は静岡県の社会福祉士会の勉強会をきっかけに発足した任意団体だ。社会福祉士だけでなく、職種や立場、制度を超えて多様な分野、年代の人たちが集まり、勉強会を開催している。「縁側」は「内でもあり、外でもあるゆるい空間。なにか資格や理由がなくても、だれもが集まることができる。ぽかぽかして、潤う。みんなの心の拠り所」という意味を込めたものだ。

この日のフォーラムは、全国からゲストや参加者が集まるスペシャル版。当日は北海道から沖縄までの約150人が参加。生活困窮の子どもや非行少年、ひとり親家庭、障害者などの支援をしている人、教員、弁護士、医療関係者、自治体職員、お寺の住職、ジャーナリストなど分野を超えた多彩な人たちが集った。田坂成生代表は「フォーラムを通してつながり、情報交換しながら、子ども・若者に対してどんな支援ができるか考えていきたい」と呼びかけた。

フォーラム1日目には毎日新聞論説委員の野沢和弘さん、社会活動家の湯浅誠さん、札幌市の社会福祉法人「麦の子会」代表の北川聡子さんが講演。それぞれの視点から障害者施策や子どもの支援などについて語りかけた。初日の最後には「縁側対談」と銘打ち、ゲストとのクロストークを実施。熱海市の齋藤栄市長、人材会社で障害者雇用に取り組む中村淳さん、ロックンロール地域福祉サービスを実践するかしわ哲さん、子どもの貧困対策に取り組む川口正義さんなどバラエティ豊かなゲストがざっくばらんに語り合った。

翌日も石垣島で非行少年や障害者の支援をしている洋嘉山紘さんや本後健・厚労省生活困窮者自立支援室長らによるシンポジウムなど密度の濃いプログラム。「縁側」らしい、ゆるやかな多様性の交錯の中から、多くの気づきを得るとともに、そこから出る熱でほかほかとあたためられるフォーラムになった。

写真／三浦 孝

月刊ガバナンス（２０１７年２月号）

困窮者支援考える

静岡でシンポ 社会福祉士ら200人

子どもや生活困窮者らの支援を考えるシンポジウム「ふじのくにニッポンの縁側フォーラム」が14日、静岡市駿河区のグランシップで行われた。人々が集う縁側のように、多様な人が集まって生き生きと暮らす社会を目指そうと、福祉関係者らでつくる市民団体が主催した。

北海道から沖縄までの社会福祉士や弁護士ら約200人が出席。社会的弱者の支援活動に取り組む湯浅誠・法政大教授は「福祉の仕事では、相手が言わない思いをくみ上げる。人間的な領域であり、人工知能（AI）に代替できない」と評価。「自分と他人を理解し、双方に橋をかけてほしい」と語りかけた。

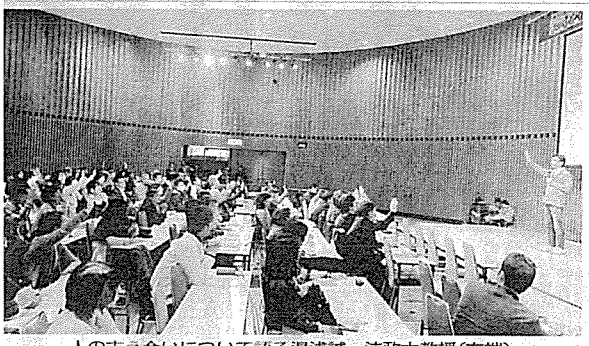
また、社会福祉法人「麦の子会」（札幌市）の北川聡子・総合施設長は対人関係を築く鍵となる「怒り」について講演。「怒りは（問題解決の）エネルギーにもなるが、周囲に連鎖しやすい」「怒りが強く続くのは6秒」と紹介。「深呼吸で気持ちを抑えたりして、相手を理解するように努めて」と助言した。

その後、斉藤栄・熱海市長や野沢和弘・毎日新聞論説委員らが、福祉と密接に関係する少子高齢化などについても意見交換した。

シンポは15日も行われる。

【田中泰義】

ピアノ買取
ヤマハ・カワイ・その他査定無料
0120-517-666
全国対応可 ※北海道・沖縄・離島は除く
ピアノプラス 検索
古物商許可：3032510064 56東京都公安委員会



人の支え合いについて語る湯浅誠・法政大教授（右端）＝静岡市駿河区のグランシップで

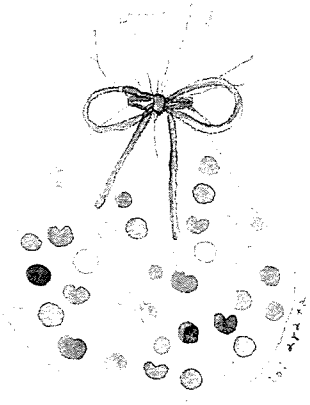
家でした」。育英基金の多額寄付もこの時代のことだった。「郷土の青年育成に関心があっ

毎日新聞（２０１７年１月１５日）

縁側のある風景　2016
（代表 田坂成生）
〒420-0064　静岡市葵区本通1丁目2−4

発行日　2017年3月31日
発　行　ふじのくにニッポンの縁側フォーラム

ホームページ
http://engawaforum.tumblr.com/

E-mail
engawa.shizuoka@gmail.com

この報告書は、2016年度の福祉医療機構の助成を受けて実施した「生活困窮の子ども・若者の自立支援」事業として作成しました。